

# 鞍と鐙

林 俊 雄

## 1. はじめに

馬は、古来人間にとって最も重要な家畜の一つであるが、その歴史についてはまだ謎の部分が多い。馬の家畜化は、いつ、どこで起こったのか、馬具はどのように発達してきたのか等々の問題について、多くの説が提唱されている。家畜化の起源については、近年ウクライナのドニェプル川流域で調査されたデレイフカ遺跡が注目されている。この遺跡はC-14年代測定法で前4000年前後とされているが、ここで馬の骨がたくさん発見され、その中でとくに丁寧に埋葬されたとおぼしき馬の歯に<sup>はみ</sup>銜を装着したときにのみ見られる摩滅が見られ、さらに後世の銜留め具（銜の両端で銜を留める用具、日本古来の用語では鏡板）にそっくりの形の鹿角製品が出土したのである。これらの証拠は、馬が人間に制御される動物として（騎乗用か車牽引用かは判断しにくい）使われていたことを示している。しかしそれ以外の馬の歯は馬が野生で食用に供されていたことを示しているとする見方もあり、馬の家畜化がまだ一般化していなかったとも考えられるが、いずれにしてもユーラシア草原地帯の一角に今から6000年も前に馬の家畜化の萌芽がみとめられたのである（Telegin 1986; Anthony, Brown 1991; 林ほか 1993; 川又 1994a）。

デレイフカでは銜そのものは出土していないが（おそらく木のような有機物であったのであろう）、鹿角製品を銜留め具と認めるならば、銜とそれにつながる頭絡と手綱とは、馬の家畜化の初期の段階から存在していたことがわかる。家畜化された馬はどのような特徴をもっていたのであろうか。車あるいは犁を

引く家畜ならば牛もいる。しかし馬には、牛にはない大きな特徴がある。それは直接背にまたがって騎乗できるということである。馬はスピードも速く、急転回・急停止も可能であり、車には越えられない山や川も容易に越えることができる。

騎乗には鞍と鐙が必要と思われがちだが、デレイフカほど古くさかのぼらなくとも、前2千年紀から前1千年紀初めまでは鞍は知られておらず、せいぜい馬の背に薄い敷物がかけられる程度であった。鐙は鞍に装着するものであるから、鞍がなければもちろん鐙も見られない。それでは鞍と鐙は、いつごろ、どこで発明されたのであろうか。本稿ではこの二つのものの起源と発展について、現在知られている資料に基づいてまとめてみたい。

## 2. 軟式鞍の出現

鞍は皮革とか（後には）木で作られるので、考古資料としては残りにくい。そこで石製・金属製の彫刻や工芸品に見られる図像資料から判断することになる。騎馬を表現した最も古い図像は1930年にイラン西南部のスーサで発見された骨に刻まれた騎馬像で、発掘者によると前4千年紀後半とされているが、この資料の年代には最近疑問が出されている（川又 1994a：156-157）。前3～2千年紀のメソポタミアやエジプトにはいくつかの騎馬像が知られているが、そのほとんどは尻の上に乗る「ロバ式騎乗」である。たとえば前14世紀のエジプトの戦闘場面を描いたものに尻の上に乗った人物が見られるが（図1）、手に持つ綱が2本でしかも長いことから、これは本来馬車用の馬で戦場からの脱走兵が乗っているものと解釈されている（Trippett 1974：62；Vainshtein 1991：214）。しかしごくまれな例ではあるが、前2000年ころのメソポタミアの回転式印章や（川又 1994a：160）エジプト新王国時代第18王朝（前1567-1085）初期の彩色騎馬像（図2）などでは明らかに馬の尻よりも前に乗っていて手綱も短く（Rachewiltz 1960：69）、前2千年紀の騎馬術についても見直す必要が出てきそうであるが、本稿のテーマである鞍はもちろん見られない。

馬の背中央への騎乗の図像は前1千年紀にはいると急激に増えはじめる。前9～7世紀のアッシリアの浮き彫りにはしばしば騎馬人物像が表現されているが、やはり馬の背には何もないか、あってもせいぜい薄い敷物程度である(図3, 4)。唯一の例外はシャルマナセル Shalmanaser 3世(前860～825)の遠征を表した青銅製の扉で、そこには王が敷物から吊された水平の板の上に足をのせている状況が示されている(図5)(Bivar 1955: 63, fig. 3; Broadbent 1985: 20)。しかしこれはあくまでも特殊な孤立した例で、後世の鐙にはつづかない(White 1962: 14; ホワイト 1985: 28)。

同じアッシリアの騎馬像でも前9世紀では「ロバ式騎乗」で(図3)、前7世紀のもの(図4)と比較すると騎乗法に進歩のあとが見られることはヴァインシュテインや川又らによって指摘されており、その原因はスキタイとの交流に求められている(Trippett 1974: 63; Vainshtein 1991: 216; 川又 1994a: 164)。この説を検証するためには馬具の比較をしなければならないであろう。鞍について見ると、アッシリアでは敷物程度であったが、スキタイではどうであったのか。残念ながら初期スキタイの考古学資料の中に鞍の形を探求することができるものはない。

古代の西アジア、さらにはギリシア・ローマ世界では結局鞍の形に変化はなく、敷物以上のものは見られない。ところが草原地帯ではスキタイ時代の後期になるとこの敷物がやや進化して厚みのあるクッション＝座布団のようなものが出現する。黒海北岸の前4世紀後半のチェルトムリク＝クルガンから出土した銀製のアンフォラ型リュトンにはスキタイが裸馬を捕らえて馬具をつけるまでの情景が描かれているが(図6)、この馬の背には単なる敷物ではなく、前後端がわずかに盛り上がって(ただし後世の硬式鞍の<sup>まえわ</sup>前輪・<sup>しずわ</sup>後輪ほど高くはないが)、<sup>はるび</sup>腹帯と<sup>むながい</sup>胸繫によって固定されている(腹帯の下に垂れている部分を革製の鐙とする見方があるが、これについては第5節で詳しく検討する)。

図像資料のほかに、スキタイ時代には実物も出土している。アルタイ山中のパジリク古墳群では地下の墓室が凍結していたため、木製品や皮革製品、さらにはミイラ化した人間や馬の遺体がほぼ完全な形で残っていた。鞍も腹帯・胸

繫・尻繫・装飾を付けた状態で数多く発見された(図7)。発掘者のルデンコは1～2号墓出土の鞍と3～5号墓の鞍との間にやや違いがみられるとして、前者を第1型式、後者を第2型式と称している(Rudenko 1953:161-171; 1970:129-137)。

どちらの型式の鞍も本体は2つのクッションをつなぎ合わせて作られている(図8)。クッションは2枚の大きな革を縫い合わせて中に鹿の毛(まれにスゲ科の草)を詰め、詰め物がかたよらないように縦方向に毛・麻・髪をより合わせた紐あるいは革紐で3本刺子縫いが施されている(図9)。クッションの前後の断面には木製の板が張られている。クッションの上に革製の腹帯(上側)を縫いつけて左右に垂らし、下側の腹帯と結ばれていたが、右側ではしっかりと縛られ、左側では鞍を馬の背に付けたときに締めるようにされていた。腹帯用の角製締め具は2例だけ2号墳で発見された(図10)。クッションの表側には軟らかく薄手のフェルト(地は黒か白で青か赤に塗られていた)をかぶせて縁辺にそって縫い込み、4カ所で革紐によって固定していた。その上に動物闘争文をシルエット風に切り抜いた装飾が張り付けられている。さらにクッションの前後に(時には中央にも)弓形の棒(図11)を革紐で固定して補強していた。クッションの下にはかなり厚手の軟らかいフェルトが縫いつけられていた。腹帯からは胸繫(幅約12mm)が出ている。腹帯から15～20cm離れてからもう1本の胸繫が上方に伸び、馬の首筋を越えてわたされていた。クッションの後ろからは尻繫(幅約22mm)が出ている。左右のクッションの後部からは、端末に木製の様々な形の玉あるいは楔形のものが付けられた革紐が垂れており、一部は楯を吊すために使われた。

第2型式の鞍(図12)の特徴は、クッションの前後端が第1型式よりも少し高いということのほかに、左右のクッションの間に板(図13)をわたして補強していたことがあげられる。また飾板が各所に多く使われ(例えばクッション前端の半円形装飾板から垂飾が出たり、革紐の両端に小飾板が付けられている)、革紐の接合部では補強の役目をも果たしている。第1型式では尻繫は直接クッションに固定されているが、第2型式ではやや複雑で、左右のクッショ

ンから出た革紐が徐々に広がり、そこにスリットを入れてもう1本の革紐と結ばれ、へら形の飾板で覆われている。パジリク5号墳から出土した巨大なフェルト製壁掛け（あるいは天幕覆い）の騎馬像にも、前部と後部がわずかに盛り上がった鞍が見られ、尻繫のはじまりにはへら形の装飾が見られる（図14）。

これとよく似た鞍は、いわゆるピョートル＝コレクション中の一対の金製帯留め具に表現されている（図15）。鞍の縦方向の筋が刺子縫いの線であるとする、この鞍には装飾的なフェルトのカバーがないことになるが、クッションの上から腹帯を付けて腹帯から胸繫が伸び、尻繫が二重構造である点などよく似ている。秦始皇帝陵近くの兵馬俑坑から出土した騎馬俑（図16）は胸繫が表現されていないのが不思議であるが、鞍本体はやはりクッションで、詰め物がかたよらないように刺子縫いの代わりにちょうど現代の体操で使うマットのように等間隔で表裏が縫い合わされ、前後端がやや高く盛り上がっており、そこから垂飾が出ている。クッションの中央を通して腹帯が回されている点もパジリクの鞍と同じである。中国にこのようなスキタイ風の軟式鞍が導入されたのは、戦国時代の趙の武靈王が前4世紀末に「胡服騎射」（筒袖の短上衣にズボン・靴という乗馬に適した遊牧民の服装をして馬に乗りながら矢を射る）を採用したのと同じ頃であろう。漢字の「鞍」という字は「革へん」であるが、このことは中国に鞍が入ってきたとき、それが「木製」ではなく、「革製」であったことを物語っている。

### 3. 硬式鞍への発展

以上のように、軟式鞍は前5世紀から前3世紀にかけてユーラシア草原地帯と中国北部に広く普及していた。この軟式鞍はたしかに敷物程度のものよりは進歩しているが、木製の骨組（<sup>くらげね</sup>鞍橋）をもつ後世の硬式鞍につながるものだろうか。パジリク1号墳出土の鞍を調査したグリャズノフは、それが後1千年紀後半に出現する硬式鞍への過渡的形態であるとみなしている（Gryaznov 1950: 57）。硬式鞍の出現年代は後述するように今では後4世紀初にまで確実にさかのぼることができるが、それでも前5～4世紀のパジリクとでは800年

前後の開きがあり、「過渡的」というにはあまりに長すぎる。パジリクよりも後の同じアルタイの大カタンド＝クルガン（前2～後1世紀）から出土した馬の木彫には、鞍の前後端がやや盛り上がっていることがみとめられるが（図17）、初期硬式鞍の前輪・後輪ほど高くはない。おそらくパジリク型の軟式鞍はあまり変化することなく草原地帯で使われていたのであろう。

紀元前後のモンゴル高原北部のノイン＝ウラ古墓群からは鞍の前輪と後輪に当たると思われるブーメラン形の木製品が発見されている（図18）。この前輪・後輪はパジリク型軟式鞍の前後端の装飾板と形が同じであるが、これには方形の孔があいているので、そこに棒を通して骨組みを作ったと考えられる。つまり全体の形は軟式鞍と同じだが、機能的には後世の硬式鞍に近いということができよう。しかしこの構造では人間を乗せることには耐えられず、荷鞍であろうと思われる（梅原 1960：85～87）。

中国では、前漢初期の陝西省咸陽楊家湾出土の騎馬俑の鞍には鞍橋の前輪・後輪は見られない（楊 1984：46）。山田は後漢末の甘肅省武威雷台漢墓出土の青銅製騎馬俑（図19、20）に付けられた鞍を居木先が表現された硬式鞍とみなすが（山田 1994：37）、筆者には鞍の前後の断面を木で補強したやや厚めの軟式鞍のように見える。しかしその前後の断面には環がつけられており、そこから胸繫と尻繫が出ていたと思われる。パジリク型の軟式鞍では胸繫は腹帯から出ていたのに比べると、これは硬式鞍の胸繫の出し方と同じであり、硬式鞍へ一歩近づいたものと見ることができよう（ただし前輪に相当する部分はかなり高くなっているが、後輪に当たる部分はほとんど盛り上がっておらず、後出する晋代の両輪垂直鞍とは異なる）。最初に出た簡報では「馬腹鞍」のあたりに「朱・白彩絵」の痕が残っていて、それは描かれた「薦（くらしき）」の残った痕のようであると記していたが（甘博文 1972：17）、その後の報告では注目すべきことに、「鞍下馬身」に「薦」が粉末の下塗で「朱彩」されているばかりでなく、「脚蹬と薦の飾りの痕跡」がなおよく見られるという（甘肅省博物館 1974：91）。「脚蹬」は本来車に乗るための足がかりであるが、薦に描かれているとすれば「あぶみ」とも考えられる。しかし公表された図版では

そのような表現は見られず(林巳 1976:351), どのような形状のものが描かれていたのか, また左右両方かそれとも左側だけに描かれていたのかについても記述がない。もちろんそれが革製か金属製かもわからない。1994年に東京の古代オリエント博物館で開かれた展覧会にこれらの騎馬俑が展示されたとき筆者が見たところ, たしかに薦に馬が描かれていることは識別できたが, 「脚蹬」は確認することができなかった。出土時には見られてもその後色あせて消えてしまったのであろうか。報告者の言うとおりに「脚蹬」が描かれていたとすれば, それは文字どおり単に乗るときの足がかりに過ぎず, 騎乗中は足からはずしていたということになろう。いずれにしてもこの鞍の型式と「脚蹬」とは, 後述する安陽孝民屯硬式鞍, 長沙金盆嶺騎人俑につづく過渡期の例として重要である。なおこの墓の年代は, 出土貨幣などから後漢靈帝の中平三年から献帝の時期(186-219年)とされている(甘肅省博物館 1974:108)。まったく同じ鞍を装着した銅馬は甘肅省張掖県の沙井(図21)や甘俊郷でも発見されている(『敦煌・西夏王国展』 1988:36-37)。

西晋代とされる河南省鄭州南関出土の陶馬(図22)では両輪がかなり高く立っており, これは木製の硬式鞍を表現している可能性もあるが, 居木先は見えない(鐙も見られない)。

それでは確実に木製と判断される硬式鞍はいつどこで最初に作られたのであろうか。木製品はなかなか残りにくいが, 装飾用に張られていた金属部分が残れば, それから鞍全体を復原することも可能となる。実物として最も古い例は, 河南省北部の安陽市郊外の孝民屯154号墓から出土した鞍金具で, それから復原された鞍は2枚の居木の上に前輪と後輪が垂直に立つタイプである(図23)。長方形の2枚の居木が鞍の基礎となっている点は, バジリク型軟式鞍が2枚のクッションを縫い合わせて作られていることと同じである(ただし硬式鞍では居木は接していないが)。居木からは2本の腹帯が出て左側で締めるようになっている。バジリク型では胸繫は腹帯から出ていたが, ここでは居木先から出ており, 尻繫も後輪からではなく居木の後端から出ている。この遺跡の年代は, 伴出した古越磁に基づいて西晋末~東晋初(4世紀初~中葉)とされている

(中国社会科学院 1983:510; 穴沢・馬目 1984:32)。

ところで孝民屯の鞍には左側にだけ居木から鐙(木芯金銅張り)が吊されている。この鐙も、実物としては最古の例である。最古の硬式鞍に最古の鐙が付けられていることは、注目すべきことである。鐙に足をかけるときには全体重がかかることになるので、軟式鞍程度では耐えられず、木製の硬式鞍が現れてはじめて鐙の使用が可能となったと考える研究者が多い(Vainshtein 1966:67; Ambroz 1973:94; アムブロズ 1988a:27; 増田 1988:63; 中村 1991:254; Clutton-Brock 1992:75)。鐙の起源については後述するが、左側だけの鐙は馬にまたがるときの足がかりとして使用しただけで、騎乗中ははずしていたらしい。というのは、湖南省長沙金盆嶺21号墓から出土した騎人俑では、前輪・後輪垂直鞍の左側に三角形の小さな鐙が見られるが、足がかけられていないからである(図24)。この墓からは永寧二年(後302)の紀年磚が発見されている(湖南省博物館 1959)。そこで、4世紀初(3世紀後半にさかのぼるかもしれない)に中国で前輪・後輪垂直型の木製硬式鞍と片側鐙が現れたが、鐙は乗馬の際の足がかりとして使用されたとする考え方が提出されている(樋口 1972:2-3)。

しかしほぼ同時期(4世紀前半)の南京象山7号墓出土の陶馬俑(図25)は両輪垂直型で尻繫の装飾も孝民屯馬俑と同じだが三角形の小さな鐙が発掘報告によれば「両側有鐙」(南京市博物館 1972:30)とあり、同じく東晋代の遼寧省朝陽袁台子石槨壁画墓では「木芯包革」の両輪垂直鞍橋と「木芯包革双馬鐙」が発見されている(図26)(遼寧省博物館文物隊 1984:45)。この袁台子石槨墓より時期的にさかのぼるとされる遼寧省北票県房身村北溝墓地8号墓からも、高い鞍橋をもつ鞍と「1副2件」の「木芯外包釘銅片」の馬鐙が出土している(董 1995:36)。この墓が属する時期は「3世紀中葉から4世紀中葉」(同上)あるいは「3世紀中葉から4世紀初」(徐 1990:166)とされているが、残念ながら正式な発掘報告はまだ刊行されていない。また東晋の画家顧愷之の「洛神賦図巻」にも騎馬人物が足を鐙に入れている状況が描かれているので、単なる足がかりではなく、当然両側鐙と考えられる(図27)[ただしこれ



は今日伝わっている最も古い模本でも宋代のものであるので、確実に東晋代の資料とすることは留保しておかなければならないが]。さらに伴出文書から北涼期（5世紀初）と思われる新疆トゥルファン・アスターナ64TAM22号墓出土の木製馬俑（図28）（古代オリエント博物館 1986：図60；国家文物局 1981：196；荒川 1989：2）も両輪垂直型で両側に鐙がある。このように4～5世紀初の資料のほとんどすべてが両側鐙を示しているのに対し、片側鐙の出土例（図像資料も含めて）は上記のほかにはないことから見て、片側鐙が一定期間ある程度の広がりをもって普及したとは思われない。また孝民屯の片側鐙についても、本来一対であったもののかたわれではないかという疑問も捨てきれない（Dien 1986：34）。

両輪垂直型の鞍は両側鐙とともに早くも4世紀後半には中国東北地区南部を通過して5世紀には朝鮮半島から日本にまで伝わった（申 1986：39；中村 1991：256；金 1993：205）。後輪垂直鞍は騎乗者の尻を支えるだけの堅牢さのない女性の横乗り用鞍に起源する儀仗的色彩が強いものであって戦闘用の鞍ではないとする見解もあるが（増田 1971：32；増田 1974：116）、逆に前後からびつたりと挟みつけることによってむしろ重装騎兵の確固とした支えとなるとする見方や（Ambroz 1973：94；アムブローズ 1988a：28）、後輪の強度はそれほど重要ではないとする見方もある（中村 1991：256）。

なお硬式鞍の出現時期についてアムブローズは「v nachare nashei ery 紀元後初頭」であろうと記述しているが（Ambroz 1973：94；アムブローズ 1988：28；山田 1994：37）、その例として彼が図示しているのは4世紀初の長沙金盆嶺騎馬俑と5世紀の朝鮮半島の資料であるので、「紀元後初頭」という表現は資料に基づかない単なる推測に過ぎない。また楊泓も「西漢末年」に鞍橋をもつ鞍が出現したのではないかとするが（楊 1984：46）、それも晋代に高い鞍橋をもつ鞍が広く流行しているからにはそれ以前の「西漢末年」に出現していたであろうという推測に過ぎない。

#### 4. 後輪傾斜鞍の出現

その後中国・朝鮮半島・日本では後輪が傾斜した鞍が現れる。その年代は必ずしも明確ではないが、高句麗では5世紀後半の舞踊塚の壁画(図29)に後輪傾斜鞍と思われる表現があり、日本では伝岩戸山古墳出土の石馬(図30)に表現された鞍から6世紀前半頃に変化が起こったとする見方がある(山田 1993: 245)。中国については、「北魏[386~534年]が建設された頃はじめて中国に後輪傾斜の鞍が出現したようである」とする見方もあるが(増田 1974: 115)、北魏の馬俑には両輪垂直鞍や軟式鞍も見られ(中村 1991: 256)、「北魏晩期」とする説もあり(楊 1984: 47)、それら旧式鞍と並存したのかそれとも出現年代そのものを再検討すべきか問題が残る。甘肅省莊浪県出土の造像塔(図31)の年代(5~6世紀前半)がもう少ししほり込めれば問題の解決に近づけよう。

次に、草原地帯に出現した硬式鞍を見てみよう。最近フンに関する考古資料をまとめたボーナは、3世紀から4世紀への替わり目頃、すなわち中国に硬式鞍が現れたのとはほぼ同じか少し早い時期に、両輪垂直鞍が内陸アジアで発明されて広まっていったと推測するが、具体的な証拠は呈示していない(Bóna 1991: 179)。

草原地帯で最古の硬式鞍の例として一部の研究者が認めているのは、ミヌシンスク盆地のウイバート=チャアタス1号墳から出土したアーチ形の白樺樹皮製品である(図32)(Kiselev 1951: tabl. XXXVI, ris. 1)。キセリョフはこれを鞍の前輪に貼りつけたものと考えたが(Kiselev 1951: 434)、高さが14cm、幅が19cmと小さいため、クイズラソフは模型の鞍の前輪と解釈した(L. R. Kyzlasov 1960: 130)。しかし息子のI. L. クイズラソフはなぜかその後の論文ではキセリョフ説を採用している(I. L. Kyzlasov 1973: 26; I. L. クイズラソフ 1988: 4)。一方、ヴァインシュテインはこの白樺製品を前輪の貼りつけとする根拠はまったくないと否定している(Vainshtein 1966: 72)。用途だけでなく年代についても議論がある。キセリョフは紀元後の初めとし

(Kiselev 1951:434), クイズラソフ父子はタシュティク Tashtyk 文化のシル Syr 期に属し1~2世紀とするが (L. R. Kyzlasov 1960:136; I. L. Kyzlasov 1973:26; I. L. クイズラソフ 1988:4), アムブロズは6世紀後半~7世紀前半としている (Ambroz 1973:97; アムブロズ 1988a:30)。このようにこの白樺製品には用途についても年代についても大いに疑問の余地があり、硬式鞍の最古の例と断定するわけにはいかない。

キルギスタンのタラス河谷にあるケンコール遺跡 (地下横穴墓群) では、鞍の前輪の覆輪かと思われる木製品 (図33) が発見されている (Bernshtam 1940: tabl. 26; Werner 1956: Taf. 35-1)。ヴェルナーはこれをノイン=ウラ出土品と同列に扱い、その年代を4~5世紀としているが (Werner 1956: 51), 形の点ではむしろパジリク出土品 (図11) や民族大移動期以後の鞍橋の覆輪 (例えば, 図65) とも似ており、これだけの出土では用途や年代を決めにくい。ケンコール遺跡は匈奴=フン同族論の支持者からは匈奴が西遷の途中に残した遺跡として注目されているが、アムブロズは遺跡全体の年代を5~8世紀と下げている (Ambroz 1981:10)。いずれにしてもケンコールの資料は今後の比較検討を必要としている。

草原地帯で確実な硬式鞍は、フンのアッティラ時代 (5世紀前半) とそれにつづく時代にカザフスタンからヨーロッパにかけての多くの埋葬遺跡で発見された鞍飾りから確認されている (カザフスタン西北部のボロヴォエ Borovoye, ウラル山脈南部のシポヴォ Shipovo, カスピ海西北岸のヴェルフニー=チルユルト Verkhni Chiryurt, ハンガリーのペーチ=ユスヨグ Pécs-Üszög, アルザス地方のムンドルスハイム Mundolsheim ほか)。それはともに一対で発見される三角形 (あるいはその一端が切り取られた形) と鎌形の金製または銀製飾板で (図34), 銜などの馬具とともに出土することが多い (ただし北カフカスのキスロヴォツク Kislovodsk レールモントフ岩 Lermontovskaya skala 第2墓地10号地下横穴墓, 黒海北岸のノヴォグリゴリエフカ Novogrigor'evka やスロヴァキア南部のレヴィツェ Lewice など, 三角形飾板だけが出土する場合もある)。ヴェルナーによれば, 全部で13点の三角形飾板のうち10点が鱗状文様で装飾さ

れている (Werner 1956 : 52)。この鱗状文様は、いわゆる民族大移動時代 (4 世紀後半～5 世紀) に草原地帯を中心として東は朝鮮半島から西はヨーロッパに至るまで武器や馬具の装飾によく使われていた。

この三角形飾板の用途については、硬式鞍の前輪の装飾 (Werner 1956 : 51; Maenchen-Helfen 1973 : 209), あるいはパジリク型の軟式鞍の前断面の装飾ではないか (Ambroz 1973 : 97; アムブローズ 1988a : 30) という推測がなされていたが、その後この三角形飾板が馬の骨格とともに原位置で発見され、用途の問題は解決することとなった。黒海東北岸ノヴォロシースク市近くのデュルソ Dyurso 川のほとりにある古墓群で、1974年にドミトリエフを団長とするノヴォロシースク地方博物館調査団が発掘をおこない、馬の埋葬を16基発見した (Dmitriev 1979; ドミトリエフ 1988)。そのうち4基では馬の骨の上に金製と銀製の三角形 (というよりは半円形に近いが) 飾板が一對ずつ発見された。その出土状況はいずれも肩甲骨のすぐ後ろに、表側を上にして、弧状の縁辺が馬の頭の方を向いていた (図35)。もしもこれらの飾板が鞍の前輪 (あるいは軟式鞍の前断面) に貼られていたのであれば、(1)前輪が前方に倒れた場合には弧状の縁辺は馬の頭の方を向くが表側が下になるはずであり、(2)前輪が後方に倒れた場合には表側は上になるが弧状の縁辺は馬の尾の方を向くはずである。従ってこれらの飾板は前輪などに垂直に貼られていたのではなく、水平に、すなわち前輪の前方に突出した居木先に貼られていたものであるという結論をドミトリエフは下した (Dmitriev 1979 : 220; ドミトリエフ 1988 : 55) (図36)。これらの飾板が出土した馬の埋葬の年代をドミトリエフは5世紀と推測しているが (Dmitriev 1979 : 221; ドミトリエフ 1988 : 56), 伴出品からみて妥当なところであろう。

それでは鎌形の飾板はどこに貼られていたのであろうか。フェティヒ N. Fettich は鞍の後輪の飾板とみなし (Werner 1956 : 52), アムブローズは当初パジリク型軟式鞍の一对の飾板と考えた (Ambroz 1979 : 230; アムブローズ 1988b : 62)。最近でもボーナは垂直前輪の飾板とみなしている (図37) (Bóna 1991 : 68, Abb. 23/1)。しかし7～8世紀のヴェルフニー＝チルユル

ト Verkhniï Chiryurt (東北カフカス) 17号墳地下横穴墓から出土した鎌形飾板(図38) (Magomedov 1975: 276; マゴメドフ 1988: 48) が居木の後方突出部縁辺にぴたりと合うことから、アムプローズはムンドルスハイムなど5世紀の鎌形飾板も同じく居木後方突出部の飾板とみなすに至った (Ambroz 1979: 230; アムプローズ 1988b: 62)。7～8世紀のヴェルフニー=チルユルトの鞍はその形からみて明らかに後輪傾斜鞍である。とすれば、同じような鎌形飾板をもつ5世紀の鞍も後輪傾斜鞍ということになる (Ambroz 1981: 13)。7～8世紀の南シベリアのトゥヴァのコケリ Kokel' 古墓群2号墳出土鞍(図39) (Vainshtein 1966a: 327, fig. 40) と新疆ウルムチ南山塩湖2号墓出土鞍(図40) (王炳華 1973: 図9, 20) は、飾板が貼られてはいないが、居木先の前方・後方の突出部の形はムンドルスハイムやヴェルフニー=チルユルトと一致する。結局、三角形(あるいは半円形)と鎌形の飾板の位置の推定が正しいとすれば、草原地帯の西部では両輪垂直鞍の段階を経ずに早くも5世紀から後輪傾斜鞍が普及していたことになる。

草原地帯東部ではまだ5世紀の例は知られていないが、硬式鞍が東アジアから伝わったことはまず疑う余地のないところであるから、当然東部にもあったと考えるべきであろう。それでは誰が硬式鞍を西方に伝えたのであろうか。それはフンであろうという考え方が一般的である。ヨルダネス Jordanes の『ゴート史 Getica』XL, 213によれば、451年にフン軍がマウリアクム Mauriacum 近くの戦場〔従来その地名は「カタラウヌム Catalaunum」〕と称されてきたが、それは後世の誤伝であることがわかってきた (Maenchen-Helfen 1973: 131 n. 620) で敗れた後、アッティラとその側近は「車を楯として円陣を組んでその中にこもった。しかしこの極限状況の中にあってもアッティラは主権を保ち、馬の鞍 (equinis sellis) を火葬用の薪の山のように積み上げ、もしも敵が自分を攻撃してきたならば炎の中に身を投じて、誰も自分を傷つけることができないようにした」。

この記事はしばしばフンが木製の鞍、すなわち硬式鞍を使用していたことを示す証拠として引用される (Werner 1956: 51; I. L. Kyzlasov 1973: 25; I.

L. クイズラソフ 1988: 4)。もっともメンヒェン＝ヘルフェンは硬式鞍出現以前の敷物でも燃やすことはできるとしてこの考え方に疑問を呈しているが (Maenchen-Helfen 1973: 208), 5世紀にフンの領域で居木の飾板が存在することを考慮すれば, この火葬用の山は木製鞍を積み上げたものと解釈するのが自然であろう。このように草原地帯西部への硬式鞍の普及はフンの進出と結び付けて考えることができるであろう。

ところでフン時代には居木の飾板は出土しているが, 居木本体 (と前輪・後輪そのもの) は今のところ出土していない。一方, 上記の7～8世紀の硬式鞍の居木には長方形の小さな孔が<sup>みずお</sup>あけられている。この孔に<sup>みずお</sup>軛を通し, それから鐙を吊したのである。実際にコケリ2号墳や南山塩湖2号墓からは鉄鐙も出土している (Vainshtein 1966a: 345; 王 1973: 31)。しかし草原地帯西部の5世紀の墓からは鐙が出土していない。せうかく鐙が装着可能な硬式鞍を採用しながら, 鐙は使わなかったのであろうか。次に鐙の起源と分布について検討してみよう。

## 5. 革鐙は存在したか?

鐙がいつどこで最初に使われたのかという問題は, いまだに決着のついていない大問題である。まず, 金属製の鐙が登場する前に素材として革紐や縄だけを使った鐙があったかどうかが問題となる。そのような有機質の材料は遺物として残りにくいので, 図像表現からその存在について論議がたたかわされている。

ミンスは, チェルトムリク出土の銀製壺に表現されたスキタイの馬 (図6) には鐙は付けられていないように見えるが, ただ腹帯から垂れている紐が革鐙のように見える, として革鐙の存在の可能性を指摘した (Minns 1913: 75)。また彼は同時にピョートル＝コレクション中の「樹下に休む騎士」(図15) の馬の鞍から下がる紐が鐙かもしれないとも指摘した (Ibid.: 277)。つづいてアレントが同じくチェルトムリク壺の鞍から垂れる革紐を革鐙と断定して, その装着想像図を発表した (図41) (Arendt 1934: 207-208)。以後多くの研究者

がこのチェルトムリク壺の表現に基づいてスキタイ革鐙説に賛同している (Wittfogel & Feng 1949 : 505; 増田 1971 : 17; 加茂 1973 : 294; I. L. Kyzlasov 1973 : 31; I. L. クイズラソフ 1988 : 7; 相馬 1977 : 143; 孫 1981 : 87)。

クラットン=ブロックは、スキタイのクル=オバ古墳出土の金製首輪両端に付けられた騎馬人物像 (図42) の脊の中央に見られる線を鐙とみなしたが (Clutton-Brock 1992 : 76)、すでに増田が指摘しているようにこの線は「脊の表面を結んだ紐」(増田 1971 : 17) であろう。チェルトムリク壺の馬に乗っていないスキタイの脊にもこの線が表現されていることを見れば (図43)、これが鐙でないことは明らかである。さらにクル=オバの騎馬像には鞍も表現されていない。これでは鐙を装着することはできない。

ところでこのクル=オバの馬は前足を折り曲げているが、本来馬が足を折り曲げるのはきわめて不自然な行為である。上記のチェルトムリク壺の馬の調教連続場面にも馬の足を折り曲げようとする光景が見られるが、ロッレはこれを鐙がなかった時代に負傷兵をすみやかに馬に乗せるために必要な技であったと解し (Rolle 1980 : 112)、むしろこれらの資料を鐙がなかったことの証拠としている。

このようにクル=オバ首輪の騎馬像に鐙を見いだす研究者はほとんどいないが、チェルトムリク壺については革鐙説が広く認められつつあった。しかし早くハスキンスがチェルトムリク壺と「樹下に休む騎士」飾板に見られる鞍から垂れ下がるものが革鐙ではなく腹帯であることを指摘し (Haskins 1952 : 263)、ビヴァーもチェルトムリク壺に見られるのは革鐙ではなく垂れ下がった腹帯であろうと指摘した (Bivar 1955 : 61)。ビヴァーは、それとほぼ同じ時代の皮革製品がよく残っているパジリク古墳群で革鐙が確認されていないことに注目している。またホワイト、ヴァインシュテイン、リッタウアーもそれが革鐙ではなく腹帯の末端が垂れ下がっているだけとみなしている (White 1962 : 141; ホワイト 1985 : 173-174; Vainshtein 1966b : 63; Littauer 1981 : 99)。ホワイトは、ハディース集などの9世紀後半のイスラム史料に鉄製鐙

に先行して木製・革製鐙があったとする記述があることに對して、それは金属の前に木や革があったはずだという後から考えついた推測に過ぎず、考古学的には何ら根拠がないと否定している (White 1962: 19; ホワイト 1985: 31-32)。つまり I. L. キズラソフが例示している現代のシベリア少数民族の革鐙や (I. L. Kyzlasov 1973: 31; I. L. キズラソフ 1988: 7), 日本の静岡県伊場遺跡出土の木製壺鐙 (山田 1975: 314) は、金属製の鐙を模倣して作られたものであり、金属鐙に先行するものではないというわけである。さらにホワイトとリッターは、革鐙では落馬したさいに足が鐙からはずれにくく、引きずられてしまう危険が高いとも指摘している (White 1962: 19; ホワイト 1985: 32; Littauer 1981: 99)。

フンの考古学を研究しているヴェルナーはチェルトムリク壺には直接言及しないが、木製あるいは革・麻縄製の鐙が金属製鐙に先行したとする考え方にきわめて懐疑的である (Werner 1956: 53)。同じくフンの研究者メンヒェン＝ヘルフェンもフンが木製か革製の鐙をもっていた可能性を否定はしないものの、フンと交流の深かったゲルマンがアッティラ王国崩壊後も長く鐙をもっていなかったことを考慮して、革鐙についてはやはり懐疑的である (Maenchen-Helfen 1973: 206)。ボーナは、フンの墓や供犠遺跡で革・縄・木製の鐙に関するヒントすら発見されていないことからそれらの存在を否定している (Bóna 1991: 179)。

前に革鐙では落馬したときに危険だという考え方を紹介したが、これに對して革鐙肯定説側からは革鐙は馬に乗るときの足がかりに過ぎず、いったん乗ってしまえばもう足からはずしたであろうという考え方も提示されている (増田 1971: 16-17)。この説の根拠としてしばしばとりあげられるのが、語源研究である。英語で鐙を意味する stirrup の語源は Oxford English Dictionary によれば、アングロ＝サクソン語の stigrap (stigan = "to climb" = 登る + rap = "rope" = 縄) に求められる、すなわち馬に乗る足がかりとして縄の輪のようなものがあつたはずだというわけである (I. L. Kyzlasov 1973: 32; I. L. キズラソフ 1988: 8; Clutton-Brock 1992: 76)。



しかし英語の stirrup やドイツ語の Steigbügel (steigen = 登る + Bügel = 湾曲した柄) はそれで説明できたとしても、フランス語の étrier (Old French では estriu) やスペイン語の estribo, この両者の祖語と考えられる \* streup, さらにイタリア語の staffa やロシア語の stremya の語源は説明できない。そこでビヴァーは、アヴァールが鐙をヨーロッパにもたらしたとする説に基づいて、未知のアヴァール語の鐙に当たる語から \* streup が生まれたのではないかという仮説を提示しているが (Bivar 1955: 65), アヴァール語の単語などはほとんど記録されていないので検証しようがない。一方ホワイトはヨーロッパ諸語の鐙に当たる語の語源をギリシア語の ἀστράβη (astrabe) に求めた。この語は荷鞍を意味するが、時には片側に紐で吊した足乗せ用の板を付けた女性用の横座り鞍にも使われ、カロリング朝時代 (751~987) には astraba は鞍全体ではなく足乗せだけを意味するようになっていた。そして本当の鐙が西欧に到達したとき、すでにフランク人にはなじみのあった馬用足乗せである astraba と同一視され、それからヨーロッパ諸語の鐙に当たる語が派生したと説明している (White 1962: 142-143; ホワイト 1985: 177-178)。

スキタイの器物に革鐙を見いだそうとする説も語源から革紐・縄鐙の存在を想定する説も、以上のように現在では旗色が悪くなりつつある。ところがつい最近再び革鐙にスポットライトを当てる論考が現れた。それは、中国雲南省江川縣李家山59号墓から出土した銅鼓形「集市貯貝器」の蓋に付けられた騎馬人物像の左側に鐙が見られることを指摘した菅谷論文である (図44) (菅谷 1994: 3)。菅谷の観察によれば「革鐙は二本の紐 (革か紐かは判別し得ない) を乙状に撚り合わせたもので、その下部は騎乗者の脚親指にきっちりと固定されぴんと張っている」。この貯貝器の年代を菅谷は「西漢中頃のやや新しい時期」(ということは前2世紀末~前1世紀初ということか) とし、これまで確認されている最古の鐙表現である湖南省長沙市金盆嶺出土騎人俑 (後302年) (図24) よりも「世界の鐙の初現が、およそ四〇〇年以上も古くなったことになる」と評価している (同上: 5)。

しかし戦国時代ないし秦代にすでに革鐙が存在したとする説も以前から主張

されている。河南省洛陽近郊金村の古墳から出土したとされる金銀錯狩獵文鏡の騎馬人物像(図45)に、梅原は「鐙の着装を認め」、「支那に於ける最も古い例」と評価し(梅原 1933: 3, 7), 原田・駒井もこれを「輪鐙らしいもの」と認めた(原田・駒井 1936: 60)。ただし原田・駒井は、『説文』では「鐙」の字に鞍に付ける「あぶみ」の意味がないが(本来「鐙」は食物を盛るたかつき,あるいは燈火をともし皿を意味する), 車に乗る際に杳を掛ける「靽」と呼ばれる革帯があったことが知られるので, この「靽」が馬に騎乗する際にも使用されるようになったのであろうと推測して, 革鐙の存在の可能性を肯定している。それをうけて増田もこの鏡の「馬腹部に一見垂飾かとも思える綫をつけた革製のあぶみが表現されている」と見たが, 「武人の足はあぶみに挿入していない」ことに注目して, これは「馬に乗る時のみ使用し, 騎乗中は足ははずして使用する」ものと解釈した(増田 1971: 16-17)。しかしこの鞍から垂れる「輪鐙のようなもの」の輪は非常に小さいので, とても足を入れられそうもない。たまたまこの部分だけアンバランスに表現してしまったのか, それとも単なる装飾か判断するのはむずかしいのではないであろうか。

相馬も増田につづいてこれを革鐙とみるが, それと同時に騎馬が表現されたいくつかのオルドス青銅飾板(図46)で馬の鞍の前方あるいは後方に(前述の小さな輪鐙とは異なって)非常に大きな「杏仁形のもの」が見られるが, これを「皮革製のあぶみと考えると大過ないのではないか」と推測した(相馬 1977: 140-143)。なぜこのように大きな輪を鐙とみなすかという点, ペルシアでは馬丁が両腕を輪状にして手の指を組み合わせることによって足がかりをつくり, 騎乗しようとする人を投げ上げる乗馬法があり, この輪状の両腕の形から輪鐙が出現したと考えているからである(相馬 1977: 154-156)。しかしこの大きな輪が鞍の後方に垂れている例もある(その方が多い)ことは, 鐙の位置としては不自然と言わざるをえない。また馬丁が投げ上げてくれるのであればいいが, 地面すれすれにまで垂れたただの大きな輪では足を掛けてもほとんど意味がないであろう。楊泓はこれを輪鐙と見ることに疑問を呈し(楊 1984: 47), ディーンははっきりと否定している(Dien 1986: 43)。

相馬はさらにパルティアにも革鐙があったと主張する。その根拠となる図像はシリアのドゥラ＝エウロポス Dura-Europos の壁画に描かれた野口バ狩りをする軽装の射手である (図47, 48)。この壁画では、馬の前足の付け根の下あたりに輪状の線が見える。これを相馬は革製の鐙とみて、乗馬中は足からはずしていたと解釈するのである (相馬 1977:144)。しかしもしもこれが革鐙であったとすれば、馬が疾駆しているのであるから軽い革鐙は後方になびくのが自然であろうが、それが逆に前方に垂れているのはきわめて不自然といわざるをえない。また相馬は描き起こしの図でこの線を馬の前足の上の方、つまり手前側につづけて伸ばし、馬の鞍の下あたりからこの線が出ているかのように描いているが、発表されているカラー図版から判断する限りこの線は馬の足の下から出ている、すなわち馬の向こう側から出ている。この線の色は茶色で手前の射手の右足の色と同じであるので、弓を射るためにやや体をひねった左足の先を表現したものとみなすべきであろう (Dien 1986:43)。ドゥラの壁画を調査したホプキンスもこれが長靴であると判断し、「鐙はない」と記している (Hopkins 1936:153)。

中国とは別にインドでも親指鐙と思われる表現が発見されている (川又 1994b:10)。前2世紀末と思われるサーンチー Sanchi 第2塔の浮彫には親指鐙と思われるものが見られ (図49) (Van Lohuizen-de Leeuw 1957:228, fig. 4), 後100年頃のクシャーン朝の押型印章にも鐙のようなものが見られる (図50)。後者をホワイトは「rigid hook かたい鉤」とみなし、足にはブーツをはいているとしているが (White 1962:15; ホワイト 1985:28), 親指と人差指の間の股に挟んでいるようにも見える。

インドではほかに親指鐙ではないが、騎乗者が足の先を腹帯の間に挟んでい鐙代わりにしているような光景がマトゥラー Mathura の浮彫 (前2～1世紀) に見られる (図51)。ホワイトはこの腹帯の間に挟むことから親指鐙が発生したのではないかと考えている (White 1962:14; ホワイト 1985:28)。しかしこのマトゥラーの浮彫では腹帯ははっきりと敷物のほぼ中央に幅広に表現されているので、足を入れている細い帯はそれとは別に馬の背からかけられたも

のと考えざるをえない。これと似たようなループ状の足掛けは、クーラー Kulu 壺の名で知られる大英博物館所蔵の青銅壺に線彫りで表現されている(図52)。この壺はインド西北部ヒマチャル＝プラデシュ Himachal Pradesh 州ゴンドラ Gondla で1857年にいくつかの金属器とともに発見されたもので、前1世紀とも(The Crossroads of Asia: 162) また後1-2世紀とも言われている(White 1962: 15; ホワイト 1985: 171)。その胴部に表現された車馬楽人群像の中に二人の槍をもった騎兵がいるが、両者の足は馬の背からかけられた紐状のものに入れられている。ただしこの壺については偽物説があることも注意しておかなければならない(同上)。いずれにしてもこれらの足掛けはすべて馬の背からかけられているのが特徴である。敷物程度の鞍では、鞍から足掛け＝鐙を吊すことなどできない相談であり、これらが後世の鞍から吊す鐙とは関係がないことを物語っている。そのほかにインド中部のナーグプル Nagpur の積石墓(前2～1世紀)で銜とともに一対で発見された湾曲した鉄製品(図53)を鐙の踏込部とする解釈もある(Leshnik 1971: 147)。この鉄製品は両端がループ状になっており、そこに紐を結んで吊し、鐙にしたというわけである。しかしこれはまだ推測の域を出ない。

以上、革鐙に関する諸説を整理してみよう。前5～4世紀のアルタイのパジリクの軟式鞍に鐙がないこと、秦始皇帝陵の馬俑に鐙が表現されていないことを考慮すると、草原地帯のスキタイ時代、中国の戦国・秦時代には革(あるいは縄)の輪鐙はなかった可能性が高く、もしあったとしてもきわめて特殊な用例と見るべきであろう。その後、前2～1世紀に中国南部の雲南省とインドではほぼ同時に親指鐙が出現した。雲南省とインドとはその間に高山があるものの比較的距離が近く、前漢代には四川の布と竹を大宛で見たという張騫の証言などから四川・雲南方面とインド・中央アジア南部との交流があったことが想定されるので、どちらかの親指鐙が伝わったとも考えられる。このインドの親指鐙が仏教の布教活動とともにアフガニスタン、トルキスタンを通して中国に伝わったとする説もあるが(Hu 1937; White 1962: 15; ホワイト 1985: 28; スカー 1988: 44)、今のところそれを証明する資料は見つかっていない。イ

インド・中国南部のどちらにも近い東南アジアには今のところ13世紀まで下らないと鐙が登場しないという報告もある(新田 1984: 4)。インドでもその後、親指鐙の表現は見られなくなり、足を完全に入れられる本格的な輪鐙はようやく10世紀になってからオリッサに登場する(White 1962: 140; ホワイト 1985: 170)。また親指鐙は裸足でないと使えないものであり(White 1962: 15; ホワイト 1985: 28)、とくに北方の寒冷地には不向きである。さらに「親指鐙」では、本来の鐙なら容易な腰を浮かせる姿勢もままならないであろう。一方インドでは紀元前後に馬の背からかけるループ状の足掛けも現れたようだが、これも鞍から吊す鐙とは関係がない。結局、革製の親指鐙や馬の背からかける足掛けは散発的な広がりしか見せず、本格的な金属製輪鐙と系譜的には関係がないであろう(川又 1994b: 11)。

## 6. 金属鐙の普及

金属製(木芯銅張り・木芯鉄張りを含む)の鐙の最古の確実な例は、第3節で指摘したように4世紀初めの中国からの出土品であるが、それよりも古く漢代からあったという説も出されている。その証拠として挙げられるのは以下の3つである。まずラウファーは、清代の金石索卷三(1821年)に掲載されている漢代の画像石に鐙をつけた騎士が表現されていると指摘した(Laufer 1909: 230, n. 2)。これは有名な山東省嘉祥県武氏祠(後漢末, 147年)の画像石の騎馬像のことで(図54)、ほかにもこれに注目する研究者がいるが(Needham 1954: 167; 加茂 1973: 310, 1980: 167)、この図は金石索の編者(馮雲鵬・馮雲鵠)による推定復元図であり、忠実な拓本(図55)では騎乗者の足に鐙があるかどうかは判別不可能と言わざるをえない(容 1936: 36a-38a; 長広 1965: 69; Wu 1989: 260)。ペリオはまたシャヴァンヌ E. Chavannes を引きつつ金石索の拓本の原石が相当に改作され、派手に装飾されてしまっており、この鐙もあとから彫られたものであることを指摘して、漢代に鐙が存在したとする説を否定している(Pelliot 1926: 260)。

次に、前漢武帝時代の將軍霍去病の墳墓上にある石獣の一つである臥牛に2

つの鐙がはっきりと刻まれていることに注目した人もいる。1950年にこれを見たソ連の考古学者キセリョフ S. V. Kiselev は興奮して、中国では前漢時代にすでに鐙が使われ始めていたことが証明されたと語ったという（武 1961：163）。しかし武伯綸はこの「鐙」の形が小さくてひもが短く、実用に合わないことから、後世の人がたわむれに刻んだものであろうと判断し（同上）、楊泓も同様に考えている（楊 1961：695）。

3 番目は1979年に青海省互助土族自治県の土洞墓から出土した青銅の飾板である（図56）。報告者はこの図像を、うずくまった大馬の背の上に小馬がいるとみなし、大馬の腹部には一対の鐙が表現されていると解釈した（許 1981：96）。この墓は伴出した土器などから後漢代とされ、この飾板は匈奴のものと類似しているとされた（同上）。この年代に着目した豊州はこれを「最早的馬鐙」と評価し、「遅くとも後1～2世紀には我が国北方遊牧民族が鐙を使用していたことの物証である」と断定した（豊 1983：104）。これに対し、楊泓はこの馬には鞍がないので鐙が表現されることはありえず、単なる幾何学的装飾であろうと判断した（楊 1984：47）。ディーンもまた楊説を紹介したうえでさらに蹄を強調した可能性もあると指摘した（Dien 1986：44）。大馬の上に小馬を乗せたいわゆる「双馬牌飾」はオルドス・長城地帯で数点発見されているが、いずれにも大馬の腹部に方形の「鐙」のような表現は見られない。この互助出土例は動物の側面に「太陽文」や「白形文」が表現されている点でも他の「双馬牌飾」とは異なるが、そのほかに動物の姿が馬のようには見えない点でも特異である。まず上の動物は顔が長くなく耳も丸いことから馬というよりはヒョウカトラのようなネコ科の動物のように見える。また下の動物も顔は長くなく鼻先が湾曲してやや尖っていることを考慮すると、鋭いくちばしをもつグリフィンか猛禽とも思われる。もしそうであれば、腹部の下の方形表現は鉤爪ではないであろうか。いずれにしてもこの飾板から漢代に鐙があったと結論づけることはできない。

一方、草原地帯西部ではロストフツェフがスキタイを駆逐して黒海北岸の草原地帯の覇権を握ったサルマタイがはじめて鐙を使用したと唱えた

(Rostovtzeff 1922:121)。彼はその根拠としてヴェセロフスキー N. Veselovski が1895年に西北カフカスのクバン Kuban 川流域で発掘したサルマタイの墓で鐙が発見されたことを挙げている (Rostovtzeff 1922:126, 130)。増田はロストフツェフの見解を紹介したうえで、サルマタイとパルティアの武装は重装騎馬であったから、金属製の鐙があったはずであるという説を立てた (増田 1971:18-19)。しかしロストフツェフは鐙の図を発表しておらず、ホワイトによればヴェセロフスキーは口頭でロストフツェフにサルマタイの墓から鐙を掘り出したと請け合っただけで、ロストフツェフ自身は出土品を見ていないという (White 1962:16; ホワイト 1985:173)。ヴェセロフスキー以後100年のあいだにサルマタイの墓は何千基と発掘されているが、いまだに金属製の鐙は発見されていない。また黒海北岸のタナイスから出土した奉獻石板には小札を綴じ合わせた鎧を着て槍を構えたサルマタイの騎士が浮彫で表現されているが、鞍も確認できず、ましてや鐙は表現されていない (図57)。

シリア東部のドゥラ＝エウロポスで発見されたパルティア重装騎兵の落書きにも鐙は見られない (図58)。増田自身も認めているように、鐙のない騎馬でも長柄の武器を使用する戦闘型式はあり、ただ効力を十分に発揮できるかどうかの問題なのである (増田 1971:20)。つまり鐙は重装騎馬に不可欠の道具というわけではないのである。また増田は、イラクのハトラ Hatra 出土のパルティア武人像の杓の先が外側にふくらんでいるのは馬上において鐙がはずれるのを防ぐためであろうと考えている (同上:19)。しかし鐙はむしろ落馬したときにははずれない方が危険であるという考え方もあり (川又 1994a:203-204)、杓の形だけでは鐙の存在を証明することはできない。

一方、キセリョフはミヌシンスク博物館所蔵の偶然の発見品であるミニアチュールの鉄製鐙をタシュティク時代のものとしたが、タシュティク時代の中のいつごろかについては言及せず、図も発表しなかった (Kiselev 1951:516-518)。L. R. クイズラソフはその図を発表し (図59)、さらにウイバート期 (3世紀) と限定した (L. R. Kyzlasov 1960:138, 140)。ウイバート期とした理由は、それ以前にも以後にも墓からミニアチュールの模型は出土しな

いからだという。I. L. キズラソフもこの考えを踏襲している (I. L. Kyzlasov 1973: 29-30; I. L. キズラソフ 1988: 6)。だがその発表された図を見ると、踏込部がかなり幅広い。4~5世紀の初期の東アジアの鐙は例外なく輪の上部から踏込部まで同じ幅で細い。踏込部の幅が広くなるのはややのちのことである (Ambroz 1973: 86; アムブローズ 1988: 21)。また輪の上の柄部がなく、輪の上部が太くなってそこに孔のあいたタイプはさらに新しい (Pletneva 1981: 245-246; 白石典之 1994: 45)。アムブローズは前者を9~10世紀、後者を13~15世紀の鐙に最も近いと指摘し (Ambroz 1973: 87; アムブローズ 1988a: 22)、ヴァインシュテインはミニアチュールの模型を作る風習はイェニセイ中流域では20世紀初まで行われていたと批判した (Vainshtein 1966b: 65)。メンヒェン=ヘルフェンやリッタウアーもヴァインシュテインの批判に同調している (Maenchen-Helfen 1973: 207; Littauer 1981: 101)。

以上のように、紀元後3世紀以前に金属製鐙が存在したとする説は今のところきわめて根拠薄弱と言わざるをえない。第3節で触れた武威雷台後漢墓(2世紀末~3世紀初)出土騎馬俑に描かれていたという「脚蹬」を鐙と認めるとすれば、それが4世紀初の中国出土例につながる最古の鐙の表現例ということになり、確実なところでは、結局4世紀初の中国出土品が最も古いという状況は今もって変わらないのである。騎馬に関連する馬具であればすべて騎馬を常用する遊牧民の発明と思い込みがちであるが、鐙に関して言えば、むしろ騎乗に下手な漢人が騎乗の際の足踏み台として発明したものであるという逆転の発想をしたのは樋口である(樋口 1972: 2-3)。樋口の結論、「三世紀の後半に騎馬民族ならぬ漢人が、鐙を発明して、それが、日本へは早くも五世紀に伝わったが、騎馬民族世界へ採用されたのは、さらに晩い時期であったということができる」は、今でも十分に納得のいくものである。

第4節の最後で、草原地帯西部のフン時代の遺跡には硬式鞍関連の遺物は出土するものの鐙は出土しないと述べた。硬式鞍をすぐに採用しながら鐙を導入しなかったのは、彼ら北方遊牧民が鐙の必要性を感じなかったからであろう。リッタウアーは、黒海北岸のスキタイの馬は体高が平均135cmとポニーのよう



に低かったので、騎乗の際に鐙を必要としなかったのであろうと述べているが (Littauer 1981:104), このことはスキタイだけでなく匈奴やフンにもあてはまるであろう。ローマ人の目からみて、フンの馬は短足・大頭・しし鼻で毛深く、不格好で小さかったという (Maenchen-Helfen 1973:203-204)。

遊牧民が鐙をなかなか採用しなかったために、西アジアやヨーロッパに鐙が出現するのも大幅に遅れることになった。上述のようにパルティアやササン朝美術には鐙は見られず (もちろん鐙の実物も出土していない), 7世紀のターク=イ=プスターンの帝王騎馬像浮彫には鞍の前輪ははっきりと確認できるものの、残念ながら足先は欠けていて鐙を付けていたかどうか判断できない (図60)。しかし同じターク=イ=プスターンの狩獵図浮彫 (図61) では鐙を付けていないことから、帝王騎馬像も鐙は付けていないとみなすべきであろう。

中央アジア西部に鐙をもたらしたのはソグド人か突厥であろう (Tanabe 1995:317)。出土地不明だが、マルシャーク B. Marshak がソグド美術にテュルク的要素が混じったもので8~9世紀とした銀製騎士像には鐙が見られる (図62) (東京国立博物館 1985:No. 159)。740年頃に描かれたとされているペンジケント Penjikent の壁画にも鐙を付けた騎士像が見られる (図63) (同上:No. 88ほか)。さらに同じく8世紀前半のシリア北部カスル=アル=ハイル=アル=ガルビー Qasr al-Hair al-Gharbi に残るウマイヤ朝の宮殿壁画にも、鐙を付けた騎者が描かれている (図64) (Schlumberger 1946-48)。ホワイトが指摘しているように、アラブはイランに侵入したときに、トルキスタンから伝わったばかりの鐙を知ったのであろう (White 1962:19; ホワイト 1985:32)。

ヨーロッパにはじめて鐙が伝えられたのは6世紀末ないし7世紀のことであつたらしい。ドニエプル中流域のポルターヴァ近郊で1912年に発見された「ペレシチェピノ Pereshchepino 遺宝」中には鞍の前輪・後輪の覆輪装飾と前輪の獅子形装飾 (いずれも金製) (図65), さらに銀製の鐙がある (図66) (Werner 1984)。この遺宝の年代は出土したビザンツの貨幣から7世紀末あるいは8世紀初と思われるが、残した民族についてはアヴァール説, スラヴ説,

ハザル説等があり、いまだに決着がついていない (Marshak & Skalon 1972 : 3-12)。前輪に一对の向かい合った獅子を付ける装飾は日本の室町時代の唐鞍にも見られ (図67)、偶然の一致とはいえ興味深い。これに対しハンガリーを中心とした東欧の7～8世紀の遊牧民の墓から出土する鐙は、アヴァールのものと考えられている。その中には長い柄部の下部に方形の孔があげられ踏込部が幅広いタイプのものがあり (図68)、アルタイのクーライ期 (7～9世紀) の鐙 (図69) や中国の唐代の鐙 (図70)、日本の7世紀の鐙 (図71) に類例が見られる。ただしアヴァールの遺跡・遺物の編年はまだ確立されておらず、鐙の正確な年代付けもこれからの作業となろう。

ウィットフォークはルフェーブル＝デ＝ノエット Lefebvre des Noëttes を引用しつつ鐙の発明は軍事的大進歩であり、弓・槍・刀剣で武装する騎馬戦士により大きな力を与えることになったと指摘した (Wittfogel & Feng 1949 : 507)。その考えをさらに発展させて、ホワイトは鐙をいち早く採用したカルル＝マルテルが新しい型の戦闘法を創造してそれがのちに封建制と呼ばれることになる新しい社会構造を生み出すもとになったとした (White 1962 : 28; ホワイト 1985 : 41)。この説には批判もあるが (Clutton-Brock 1992 : 76)、鐙の役割を大きく評価したものとして注目すべきであろう。

## 7. おわりに

鞍と鐙の歴史を簡単にまとめてみれば、次のようになるであろう。前1千年紀前半に草原地帯のスキタイ系遊牧民が軟式鞍を使い始めた。鞍を固定するのに草原地帯の西部では胸繫と腹帯を使い、東部ではさらに尻繫も用いた。前4世紀末頃に軟式鞍は中国に伝わった。軟式鞍に革鐙は付けられていなかった。前2～1世紀に南アジアの一部で革製の親指鐙が使われたが、あまり広まらなかったようである。

後2世紀末～3世紀初に胸繫の装着法が硬式鞍に近い厚手の軟式鞍が中国に現れ、これには足がかりが付けられていた可能性がある。3世紀末には同じく中国に前輪・後輪垂直の木製硬式鞍が現れた。ごく初期にはこの硬式鞍の左側

に単に騎乗する際の足がかりとして金属製（ないし木芯金属張り）の鐙が付けられた可能性がある。しかしそれはあったとしてもごく一時的、局地的なもので、すぐに両側に付けられて騎乗中もずっと足を入れて使われるようになり、そのタイプの硬式鞍が5世紀には朝鮮半島から日本にまで伝えられた。その後まもなく東アジアでは後輪傾斜鞍が現れ、以後長く使われるようになった。

一方草原地帯にも5世紀には硬式鞍が伝えられ、おそらくフンによって東欧にまで達した。それはすでに後輪傾斜鞍であったにもかかわらず、鐙は付けられていなかった。7世紀にはヨーロッパにも鐙が登場するが、それをもたらしたのはアヴァールであろう。8世紀には中央アジアから西アジアにまで（おそらく突厥とソグド人によって）鐙が伝えられ、アラブの採用するところとなった。鐙の採用は戦術面で大革命を起こしただけでなく、政治・社会面にも大きな影響を与えることになった。このように硬式鞍と鐙の発生は中国であろうが、それらの開発と伝播には草原地帯の遊牧民が大きな役割を果たしていたということができる。

#### 参考文献

- 穴沢啄光, 馬目順一 1984: 「安陽孝民屯晋墓の提起する問題——「現存最古の鐙」を含む馬具をめぐって——」『考古学ジャーナル』227: 31-36; 228: 35-38。
- アムブロース 1988a: 「編年基準としての中世初期（4-8世紀）の鐙と鞍」林俊雄編訳『中世初期ユーラシア草原における馬具の発達』根岸競馬記念公苑, pp. 19-41。
- アムブロース 1988b: 「ドミトリエフ論文に寄せて」林俊雄編訳『中世初期ユーラシア草原における馬具の発達』根岸競馬記念公苑, pp. 61-63, 74。
- 荒川正晴 1989: 「阿斯塔那古墳群墳墓一覧表」『吐魯番出土文物研究会会報』8: 1-6。
- 伊勢原市教育委員会 1995: 『三ノ宮・下尾崎遺跡 三ノ宮・上栗原遺跡 発掘調査報告書』（伊勢原市文化財調査報告書 第17集）。
- 梅原末治 1984: 『増訂 洛陽金村古墓聚英』同朋舎出版。
- 梅原末治 1933: 「細川侯爵家蔵金銀錯狩獵文鏡」『美術研究』13: 1-7。
- 梅原末治 1960: 『蒙古ノイン・ウラ発見の遺物』東洋文庫論叢27。
- 『エルミタージュ美術館4: スキタイとシルクロードの文化』日本放送出版協会, 1989。

- 加茂儀一 1973：『家畜文化史』法政大学出版局。
- 加茂儀一 1980：『騎行・車行の歴史』法政大学出版局。
- 川又正智 1994a：『ウマ駆ける古代アジア』講談社。
- 川又正智 1994b：「鐙の発生」『草原考古通信』4：10-13。
- ギルシュマン，ロマン 1966：『古代イランの美術Ⅱ（人類の美術）』新潮社。
- 金斗喆 1993：「加耶の馬具」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社，pp. 199-220。
- I. L. クイズラソフ 1988：「鐙の起源について」林俊雄編訳『中世初期ユーラシア草原における馬具の発達』根岸競馬記念公苑，pp. 1-17。
- 古代オリエント博物館 1986：『中国新疆出土文物 中国・西域シルクロード展』旭通信社。
- 白石典之 1994：「モンゴル部族の自立と成長の契機」『新潟大学人文学科研究』86：27-51。
- 申敬澈 1986：「古式鐙考」『古代文化』38(6)：22-43。
- スカー，クリス編 1988：『朝日＝タイムズ 世界考古学地図』朝日新聞社。
- 菅谷文則 1994：「革鐙の新例と，鐙の発生」『青陵』84：2-5。
- 『世界の文様4：インド・東南アジアの文様』小学館，1992。
- 相馬隆 1977：『流沙海西古文化論考』山川出版社。
- 『朝鮮の文化財』平壤，文化保存社，1980。
- 東京国立博物館 1985：『シルクロードの遺宝』日本経済新聞社。
- ドミトリエフ 1988：「ノヴォロシースク市近郊デュルソ川畔民族大移動時代の戦士と馬の埋葬」林俊雄編訳『中世初期ユーラシア草原における馬具の発達』根岸競馬記念公苑，pp. 51-61，64-73，75。
- 『敦煌・西夏王国展』東宝企画，1988。
- 長広敏雄 1965：『漢代画像の研究』中央公論美術出版。
- 中村潤子 1991：「騎馬民族の考古学」森浩一編『考古学 その見方と解釈：上』筑摩書房，pp. 243-285。
- 新田栄治 1984：「東南アジアの騎馬と馬具——鐙の出現についての小考——」『N O A 鹿児島大学教養部考古学研究室報』2：1-5。
- 『日本馬具大鑑2 古代下』日本中央競馬会，1991。
- 林俊雄，高浜秀，雪嶋宏一，川又正智 1993：「ユーラシア草原における騎馬と馬車の歴史」『馬の博物館研究紀要』6：1-24。
- 林巳奈夫 1976：『漢代の文物』京都大学人文科学研究所。
- 原田淑人，駒井和愛 1937：『支那古器図攷 舟車馬具篇』東方文化学院東京研究所。
- 樋口隆康 1972：「鐙の発生」『青陵』19：2-3。
- ホワイト，リン Jr. 1985：『中世の技術と社会変動』内田星美訳 思索社。
- マゴメドフ 1988：「ヴェルフネ・チルユルト古墓群出土の骨製鞍飾板」林俊雄編訳『中世初期ユーラシア草原における馬具の発達』根岸競馬記念公苑，pp. 43-50。

- 増田精一 1971:「鐙考」『東京教育大学文学部 史学研究』81:1-33。  
 増田精一 1974:「考古学からみた東亜の馬具の発達」森浩一編『馬』社会思想社, pp. 87-118。  
 増田精一 1988:「古代鞍の系譜」『長野県考古学会誌』57:56-66。  
 山田良三 1975:「古墳出土の鐙の形態的変遷」榎原考古学研究所編『榎原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』吉川弘文館, pp. 287-314。  
 山田良三 1993:「古墳時代馬鞍とその構造への試考」森浩一編『馬の文化叢書 1:古代——埋もれた馬文化』馬事文化財団, pp. 236-245。  
 山田良三 1994:「古代の木製馬鞍」『榎原考古学研究所論集』12, 吉川弘文館, pp. 35-59。

\* \* \*

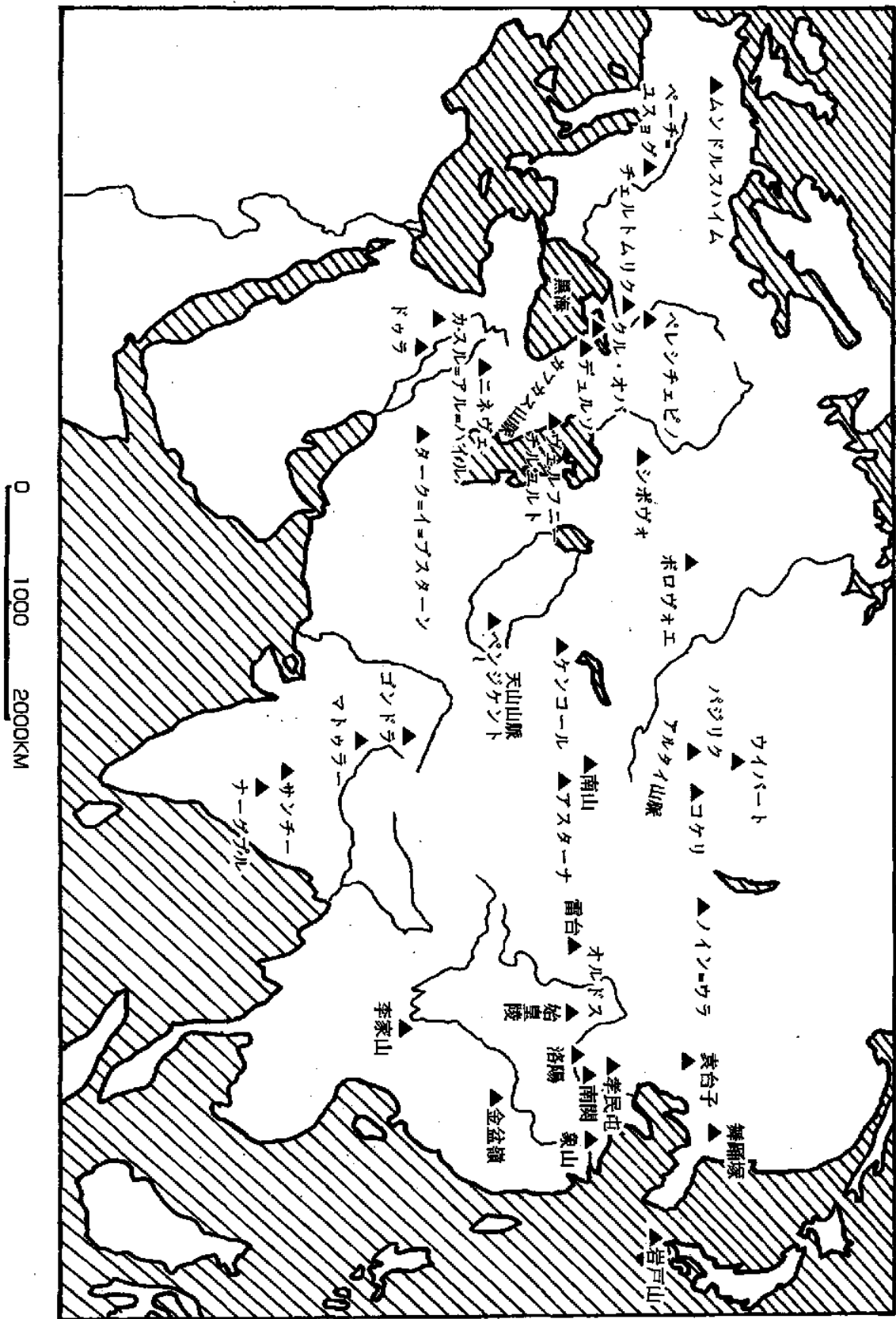
- 董高 1995:「公元3至6世紀慕容鮮卑・高句麗・朝鮮・日本馬具之比較研究」『文物』10:34-42。  
 豊州 1983:「考古雜記」『考古与文物』1:101-105。  
 甘博文 1972:「甘肅武威雷台東漢墓清理簡報」『文物』2:16-24。  
 甘肅省博物館 1974:「武威雷台漢墓」『考古學報』2:87-109。  
 国家文物局古文獻研究室, 新疆維吾爾自治區博物館, 武漢大學歷史系 1981:『吐魯番出土文書』1, 文物出版社。  
 湖南省博物館 1959:「長沙兩晉南朝隋墓發掘報告」『考古學報』3:75-105。  
 遼寧省博物館文物隊, 朝陽地區博物館文物隊, 朝陽縣文化館(李慶發) 1984:「朝陽袁台子東晉壁画墓」『文物』6:29-45。  
 南京市博物館(袁俊卿) 1972:「南京象山5号, 6号, 7号墓清理簡報」『文物』11:23-41。  
 齊東方 1993:「中国早期馬鐙的有關問題」『文物』4:71-78, 89。  
 秦始皇兵馬俑博物館, 秦俑坑考古隊 1983:『中国歷代彫塑 秦始皇陵俑塑群』陝西人民美術出版社。  
 青海省文物處, 青海省考古研究所 1994:『青海文物』文物出版社。  
 容庚 1936:『漢武梁祠画像錄』北平考古學社。  
 孫機 1981:「唐代的馬具与馬飾」『文物』10:82-88, 96。  
 王炳華 1973:「塩湖古墓」『文物』10:28-36。  
 武伯綸 1961:「關於馬鐙問題及武威漢代鳩杖詔令木簡」『考古』3:163-165。  
 徐基 1990:「關於鮮卑慕容部遺跡的初步考察」『中国考古学会第六次年会論文 集』160-173。  
 許新国 1981:「青海省互助土族自治县東漢墓葬出土文物」『文物』2:96。  
 楊泓 1961:「關於鉄甲・馬鎧和馬鐙問題」『考古』12:693-696。  
 楊泓 1984:「中国古代馬具的發展和对外影響」『文物』9:45-54, 76。  
 『中国美術全集 絵画編1』1986:北京, 人民美術出版社。

- 『中国美術全集 雕塑編3：魏晉南北朝雕塑』 1988：北京，人民美術出版社。
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊（孫秉根） 1983：「安陽孝民屯晉墓發掘報告」『考古』6：501-511。
- 中国文物精華編輯委員会編 1993：『中国文物精華1993』文物出版社。
- \* \* \*
- 『アルタイ文明展』（韓国語）1995：ソウル，国立中央博物館。
- \* \* \*
- AMBROZ (АМБРОЗ А.К.) 1973: Стремена и седла раннего средневековья как хронологический показатель (VI-VIII вв.). Советская археология 4:81-98.
- AMBROZ 1979: К статье А. В. Дмитриева. Советская археология 4:229-231.
- AMBROZ 1981: Восточноевропейские и среднеазиатские степи V- первой половины VIII в. Археология СССР-Степи Евразии в эпоху средневековья. Москва, сс. 10-23.
- ANTHONY, David W. and BROWN, D.R. 1991: The origins of Horseback Riding. *Antiquity* 65:22-38.
- ARENDT, W. W. 1934: Sur l'étrier chez les Scythes. *Eurasia Septentrionalis Antiqua* IX:206-208.
- BARNETT, R.D. 1975: *Assyrian Sculpture in the British Museum*. Toronto.
- BELENIZKI, A. M. 1980: *Mittelasiien. Kunst der Sogden*. Leipzig.
- BERNSHTAM (БЕРНШТАМ А. Н.) 1940: Кенкольский могильник. Ленинград.
- BIVAR, A. D. H. 1955: The Stirrup and its Origins. *Oriental Art* 1:61-65.
- BIVAR, A. D. H. 1972: Cavalry Equipment and Tactics on the Euphrates Frontier. *Dumbarton Oaks Papers* 26:273-291, 30 figs.
- BÓNA István 1991: *Das Hunnen-Reich*. Budapest.
- BROADBENT, Moira 1985: *Animal Regalia*. Whitchurch, Hampshire.
- BUNKER, Emma C. 1978: The Anecdotal Plaques of the Eastern Steppe Regions. *Arts of the Eurasian Steppelands*. University of London, pp. 121-142.
- CHARRIER, Georges 1974: *Die Kunst der Skythen*. Köln.
- CLUTTON-BROCK, Juliet 1992: *Horse Power-A History of the Horse and the Donkey in Human Societies*. London.
- The Crossroads of Asia : Transformation in Image and Symbol in the Art of Ancient Afghanistan and Pakistan*. The Ancient India and Iran Trust, Cambridge, 1992.
- DIEN, Albert E. 1986: The Stirrup and its Effect on Chinese Military History. *Ars Orientalis* 16:33-56.
- DMITRIEV (ДМИТРИЕВ А. В.) 1979: Погребения всадников и боевых коней в могильнике эпохи переселения народов на р. Дюрсо близ Новороссийска. Советская археология 4:212-229.

- GAVRILOVA (ГАВРИЛОВА А. А.) 1965: Могильник Кудыргэ. Москва-Ленинград.  
*Gold der Skythen aus der Leningrader Eremitage*. München, 1984.
- GRYAZNOV (ГРЯЗНОВ М. П.) 1950: Первый Пазырыкский курган. Ленинград.
- HASKINS, J. F. 1952: Northern Origins of "Sasanian" Metalwork. *Artibus Asiae* 15: 241-267, 324-347.
- HERZFELD, Ernst 1920: *Am Tor von Asien*. Berlin.
- HOPKINS, C. 1936: The Murals with Banquet and Hunting Scenes. *The Excavations at Dura Europos, Preliminary Report of Sixth Season* (ed. by M. I. Rostovtzeff et al.). New Heaven, pp. 146-167.
- HU Shih (胡適) 1937: The Indianization of China: A Case Study in Cultural Borrowing. *Independence, Convergence and Borrowing*. Cambridge Mass., pp. 219-247.
- KISELEV (КИСЕЛЕВ С. В.) 1951: Древняя история Южной Сибири. Москва.
- KISS, Attila 1977: *Avar Cemeteries in County Baranya*. Budapest.
- KYZLASOV, I. L. (КЫЗЛАСОВ И. Л.) 1973: О происхождении стремян. Советская археология 3: 24-35.
- KYZLASOV, L. R. (КЫЗЛАСОВ Л. Р.) 1960: Таштыкская эпоха. Москва.
- LAUFER, Berthold 1909: *Chinese Pottery of the Han Dynasty*. Leiden.
- LESHNIK, Lawrence S. 1971: Some Early Indian Horse-Bits and Other Bridle Equipment. *American Journal of Archaeology* 75: 141-150.
- LITTAUER, M. A. 1981: Early Stirrups. *Antiquity* 55: 99-105.
- L'or des Scythes*. Bruxelles, 1991.
- MAENCHEN-HELFEN, O. 1973: *The World of the Huns*. Los Angeles.
- MAGOMEDOV (МАГОМЕДОВ М. Г.) 1975: Костяные накладки седла из Верхне-чирюртовского могильника. Советская археология 1: 275-281.
- MARSHAK and SKALON (МАРШАК Б. И. и СКАЛОН К. М.) 1972: Перещепинский клад. Ленинград.
- MINNS, E. H. 1913: *Scythians and Greeks*. Cambridge.
- MOSKOVA (МОШКОВА М. Г.) 1992: Стенная полоса Азиатской части СССР в скифо-сарматское время (Археология СССР). Москва.
- PELLIOT, Paul 1926: Review of Commandant Lefebvre des Noëttes, *La force à travers les âges*, Paris, 1924. *T'oung Pao* 24: 256-268.
- PLETNEVA (ПЛЕТНЕВА С. А.) 1981: Степи Евразии в эпоху средневековья (Археология СССР). Москва.
- PORADA, Edith 1965: *The Art of Ancient Iran (Pre-Islamic Cultures)*. New York.
- RACHEWILTZ, Boris De (tr. by R. H. Boothroyd) 1960: *Egyptian Art: An Introduction*. London.
- RAWSON, Jessica & Emma BUNKER

- ROLLE, R. 1980: *Die Welt der Skythen*. Luzern, Frankfurt/M.
- ROSTOVITZEFF, M. 1992: *Iranians and Greeks in South Russia*. Oxford.
- RUDENKO. (РУДЕНКО С. И.) 1953: Культура населения горного Алтая в скифское время. Москва-Ленинград.
- RUDENKO 1969: *Die Kultur der Hsiung-nu und die Hügelgräber von Noin Ula*. Bonn.
- RUDENKO 1970: *Frozen Tombs of Siberia*. London.
- SCHLUMBERGER, Daniel 1946-48: Deux fresques Omeyyades. *Syria* 25:86-102. *Scythian Art*. Leningrad, 1986.
- TANABE Katsumi 1995: Nana on Lion—East and west in Sogdian Art—. *Orient* XXX-XXXI:309-334.
- TELEGIN, D. Y. 1986: *Dereivka — A Settlement and Cemetery of Copper Age Horse Keepers on the Middle Dniepr (British Archaeology Reports International Series 287)*. Oxford.
- TRIPPETT, Frank 1974: *The First Horsemen*. New York.
- VAINSHTEIN (ВАЙНШТЕЙН С. И.) 1966a: Памятники второй половины I тысячелетия в Западной Туве. Труды Тувинской комплексной археолого-этнографической экспедиции, II:292-347.
- VAINSHTEIN 1966b: Некоторые вопросы истории древнетюркской культуры. Советская этнография 3:60-81.
- VAINSHTEIN 1991: Мир кочевников центра Азии. Москва.
- VAINSHTEIN & KRYUKOV (КРЮКОВ М. В.) 1984: Седло и стремя. Советская этнография 6:114-130.
- VAN LOHUIZEN-DE LEEUW, J. E. 1957: Heinrich Zimmer and Indian Art. *Arts Asiatiques* 4:221-235.
- WERNER, Joachim. 1956: *Beiträge des Attila-Reiches*. München.
- WERNER 1984: *Der Grabfund von Malaja Pereščepina und Kuvrat, Kagan der Bulgaren*. München.
- WHITE, Lynn, Jr. 1962: *Medieval Technology and Social Change*. Oxford.
- WITTFOGEL, K. A. and FÊNG Chia-shêng 1949: *History of Chinese Society Liao (907-1125) (Transactions of the American Philosophical Society, New Series 36 1946) 7*. Philadelphia.
- WU Hung 1989: *The Wu Liang Shrine : The Ideology of Early Chinese Pictorial Art*. Stanford.







1. エジプト。騎馬像浮彫。前1350年頃。  
(Trippett 1974)



2. エジプト。騎馬像。前15c。  
(Rachewiltz 1960)



3. アッシリア。青銅浮彫。前850頃。  
(Trippett 1974)



4. アッシリア、ニネヴェ。  
アッシュールバニパル王野驢狩。前645頃。  
(ギルシュマン 1966)



5. アッシリア王宮青銅扉。  
シャルマナセル3世遠征。前853。  
(Broadbent 1985)



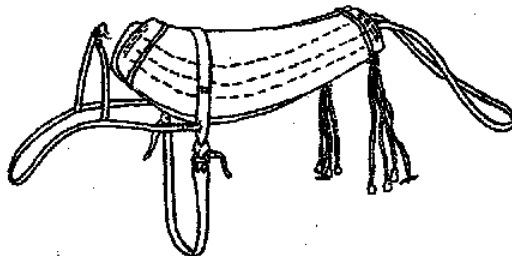
6. 黒海北岸、チェルトムリク古墳。  
銀製アンフォラ型リュトン、前4c後半。(Rolle 1980)



7. アルタイ、バジリク1号墳。馬装具復原、前5c後半。(Rolle 1980)



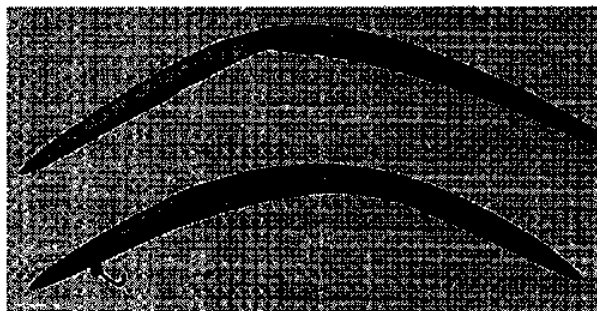
8. アルタイ、バジリク。軟式鞍前面、前5-4c。(筆者撮影)



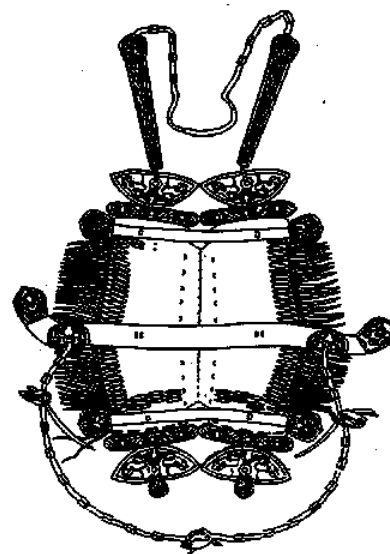
9. アルタイ、バジリク1号墳。軟式鞍復原、前5c後半。(Gryaznov 1950)



10. アルタイ、バジリク4号墳。骨製腹帯留め具、前5c末-4c初。(Rudenko 1970)



11. アルタイ、バジリク1号墳。鞍補強材、前5c後半。(Rudenko 1970)



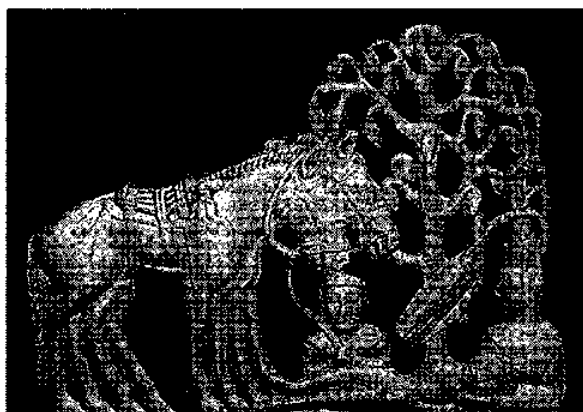
12. アルタイ、バジリク5号墳。軟式鞍、前4c前半。(Rudenko 1970)



13. アルタイ、パジリク 3 号墳。鞍補強材、  
前 5 c 末 - 4 c 初。(Rudenko 1970)



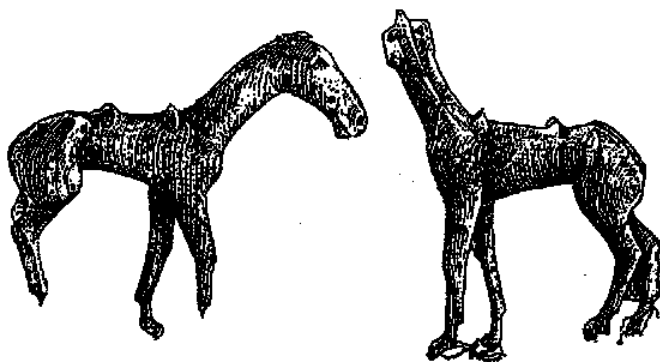
14. アルタイ、パジリク 3 号墳。  
天幕覆い、前 4 c 初。  
(Charrier 1972)



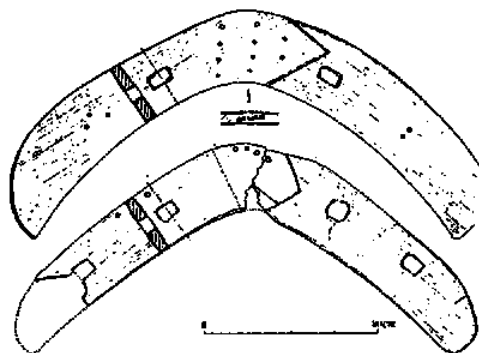
15. ビョートル・コレクション。帯留め具、  
前 4 c。(Gold der Skythen)



16. 秦、始皇帝陵。馬俑、前 3 c 後半。  
(秦始皇帝馬俑博物館、1983)



17. アルタイ、大カタンダ古墳。木製装飾品、  
前 2 c - 後 1 c。(Moshkova 1992)



18. 北モンゴル、ノイン=ウラ 6 号墳。鞍  
橋復原、1 c。(梅原 1960)



19. 甘肅、武威雷台。青銅製騎馬俑、  
2c末—3c初。(中国美術全集 雕  
塑編3)



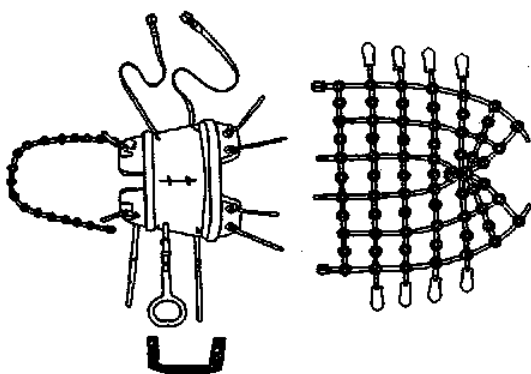
20. 甘肅、武威雷台。青銅製騎馬俑、  
2c末—3c初。(堀昉撮影)



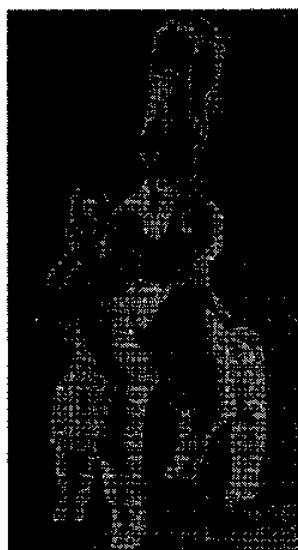
21. 甘肅、張掖沙井。銅馬、2  
c末—3c初。(敦煌・西夏王国  
展)



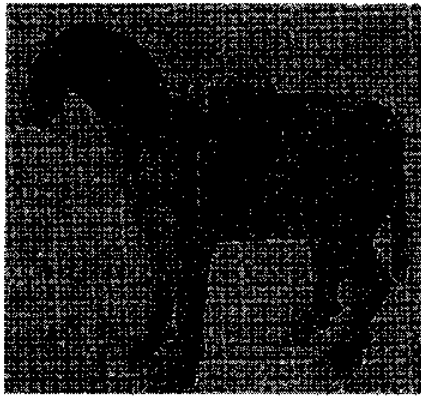
22. 河南、鄭州南関。灰陶鞍馬、  
3c末—4c前半。(中国美術全  
集 雕塑編3)



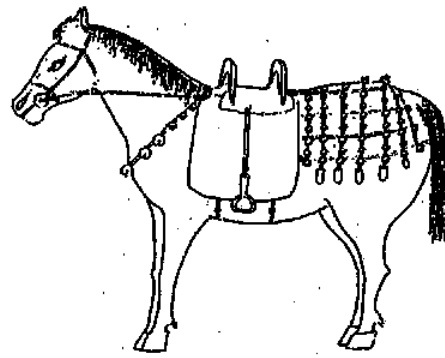
23. 河南、安陽孝民屯154号墓。硬式鞍復原、  
4c前半。(穴沢・馬目 1984)



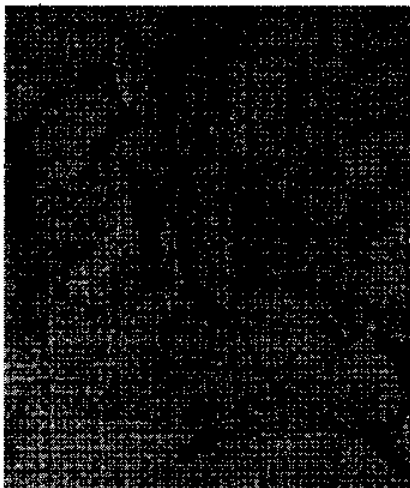
24. 湖南、長沙金盆嶺21号  
墓。施釉騎人俑、4c初。  
(湖南省博物館 1959)



25. 南京、象山7号墓。陶馬俑、4c前半。(南京市博物館 1972)



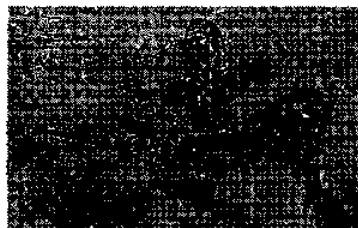
26. 遼寧、朝陽袁台子。馬具復原図、4c前半。(遼寧省博物館文物隊 1984)



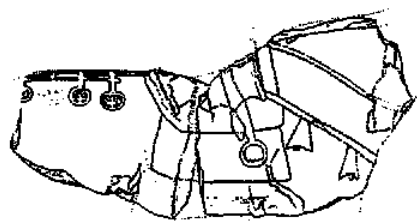
27. 顧愷之、洛神賦図巻。7c (原本4c末?) (中国美術全集 絵画編1)



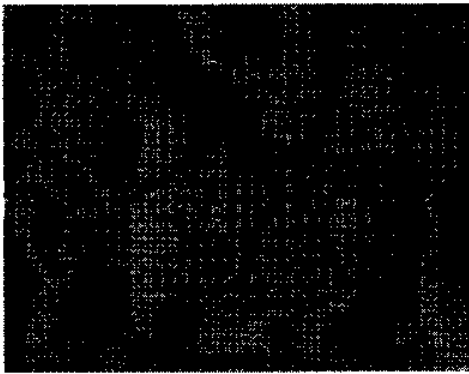
28. 新疆、トゥルファン、アスターナ64TAM22号墓。木製馬、4-5c。(古代オリエント博物館 1986)



29. 高句麗、舞踊塚。壁画、5c後半。(朝鮮の文化財 1980)



30. 伝福岡岩戸山古墳出土。石馬、6c前半。(山田 1993)



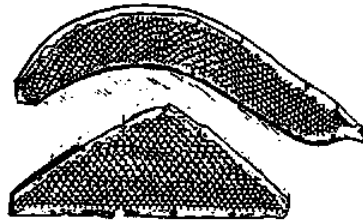
31. 甘肅、莊浪。造像塔、5c—6c前半。  
(中国美術全集 雕塑編3)



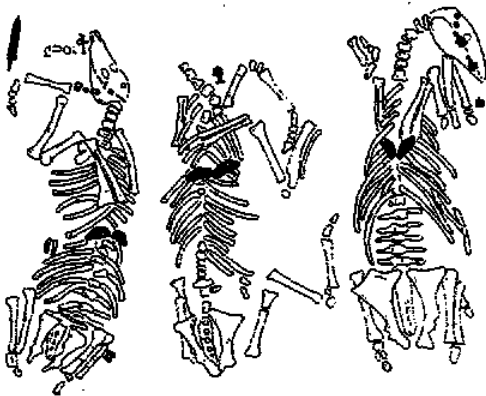
32. 南シベリア、ウイバート=チャアタス1号墳。白樺樹皮製前輪貼付裝飾(?), 1c—2c or 6c—7c(?).  
(Kiselev 1951)



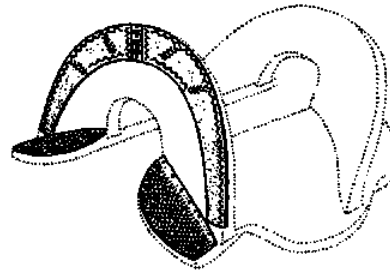
33. キルギスタン、ケンコール。鞍覆輪、4c—5c or 5c—8c(?) (Werner 1956)



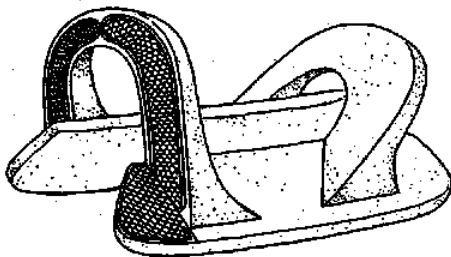
34. アルザス、ムンドルスハイム。居木先後飾り、5c前半。  
(Werner 1956)



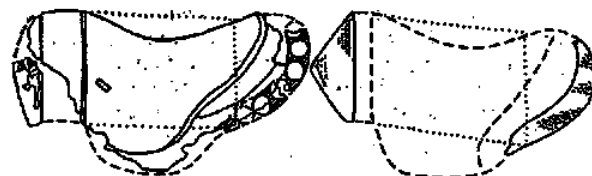
35. 黒海東北岸、デュルソ。居木先飾り出土状況、5c。(Dmitriev 1979)



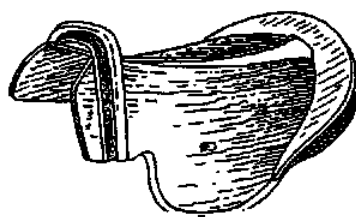
36. 黒海北岸、メリトボル。居木先飾り復原、5c。(Dmitriev 1979)



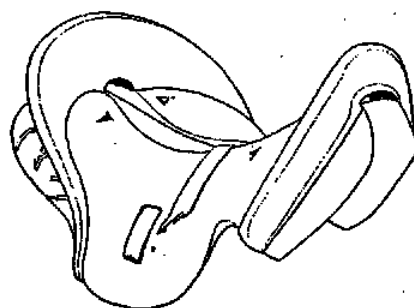
37. ハンガリー、ペーチ=ユスヨグ。鞍橋飾り貼付復原、5c。(Bóna 1991)



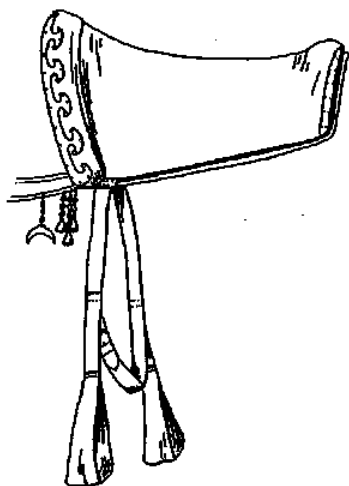
38. 東北カフカス、ヴェルフニー=チルユルト17号墳。鞍復原、7c。(Ambroz 1979)



39. 南シベリア、トゥヴァ、コケリ2号墳。鞍復原、7c。  
(Vainshtein 1966a)



40. 新疆、ウルムチ、南山塩湖2号墓。鞍復原、7c。(王 1973)



41. スキタイ革鐙装着推定復原、前4c後半。(Arendt 1934)



42. 黒海北岸、クル=オバ古墳。金製首輪、前4c後半。(Scythian Art 1986)



43. 黒海北岸、チェルトムリク古墳。銀壺装飾、前4c後半。(Rolle 1980)



44. 雲南、李家山59号墓。銅鼓型貯貝器装飾、前2-1c。(中国文物精華編輯委員会 1993)

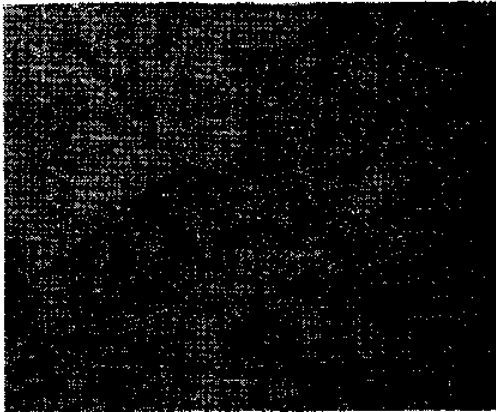




45. 河南、洛陽金村。金銀錯狩獵文鏡、前3c。(梅原 1984)



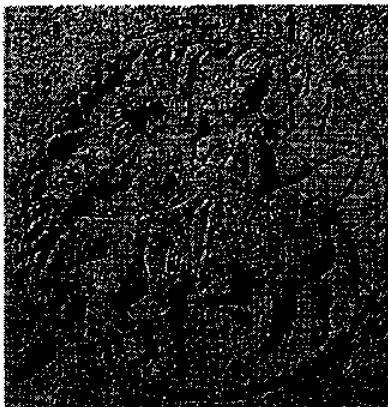
46. オルドス。青銅帶留飾板、前3c。(Rawson, Bunker 1990)



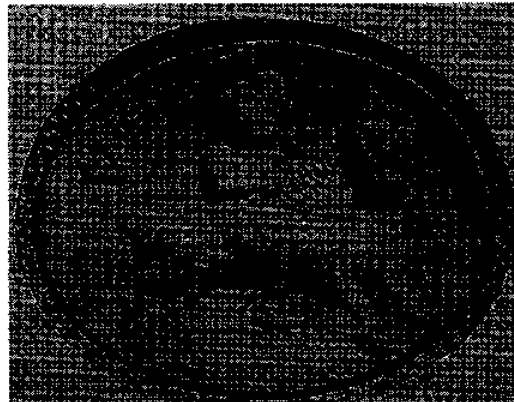
47.48. シリア、ドゥラエウロポス。「野ロバを狩る騎手」壁画とその描き起し、2c。(ギルシュマン 1966)



(相馬 1977)



49. インド、サーンチー第2塔。前2c末。(世界の文様4)



50. インド、クシャーン朝。押型印章、後100頃。(White 1962)



51. インド、マトゥラー。浮彫、前2-1c。(Littauer 1981)



52. インド、ゴンドラ。青銅壺線彫り描き起し、前1-後2c。(The Crossroads of Asia)



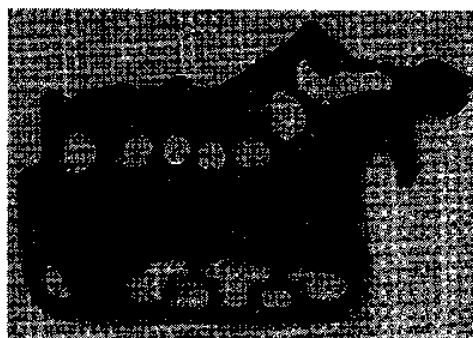
53. 中央インド、ナーグプル、積石墓。鉄製鐙踏込部?、前2-後1c。(Leshnik 1971)



54. 山東、嘉祥武氏祠。画像石、2c中頃。金石索の復原図 (Wu 1989)



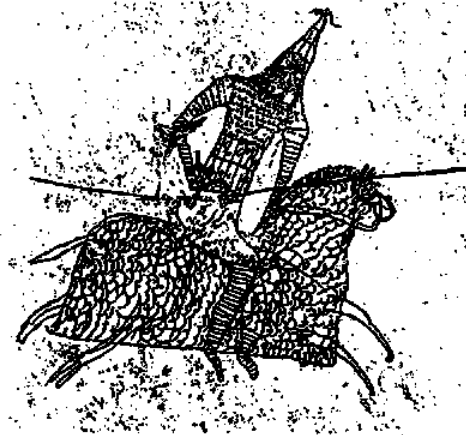
55. 山東、嘉祥武氏祠。後壁画像、2c中頃。(Wu 1989)



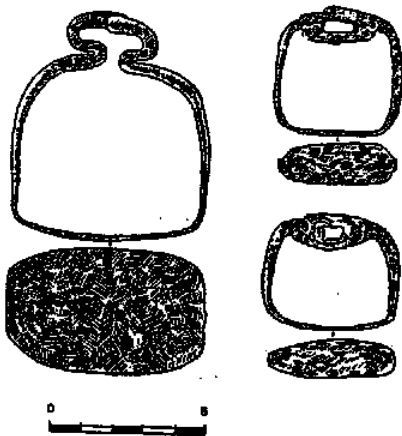
56. 青海、互助、土洞墓。青銅飾板、1-2c。(青海省文物処 1994)



57. 黒海北岸、タナイス。奉献石板、2c。  
(Minns 1913)



58. シリア、ドゥラ=エウロポス。  
パルティア重装騎兵落書、2-3c。  
(ギルシュマン 1966)



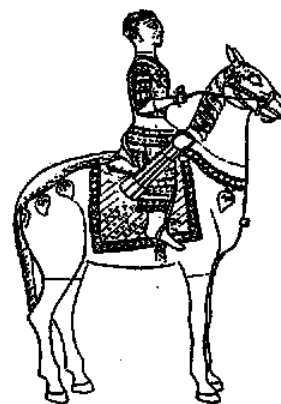
59. 南シベリア、ミヌシンスク。  
鎧ミニアチュール、3c or 9-15c  
(?)。(L.R.Kyzlasov 1960)



60. イラン、ターク=イ=ブスターン。  
ホスロー2世浮彫、7c初。  
(Porada 1965)



61. イラン、ターク=イ=ブスターン。狩獵図浮彫、7c初。  
(ギルシュマン 1966)



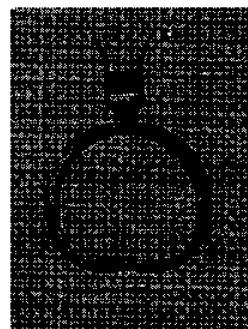
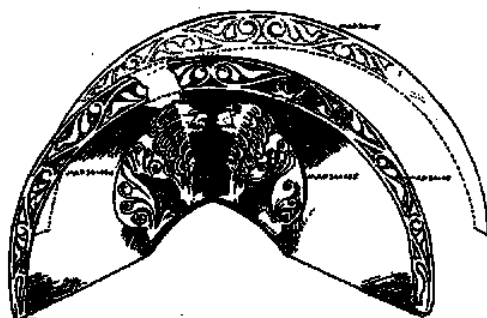
62. 中央アジア。銀製  
騎士像、8-9c。(東  
京国立博物館 1985)



63. 中央アジア、ペンジケント  
VI-41号室。壁画、8c初。  
(Belenizki 1980)



64. シリア、ウマイヤ朝宮殿、カスル=アル=  
ハイル=アル=ガルビー。壁画、8c前半。  
(Schlumberger 1946-48)



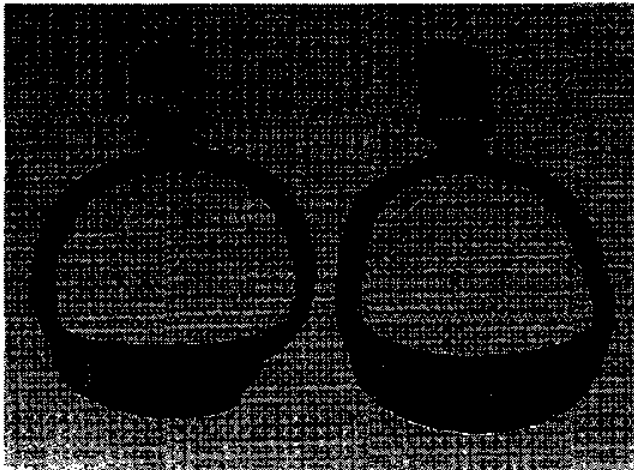
65.66. ウクライナ、ペレシチェピノ。覆輪装飾・前輪獅子形  
装飾と銀鐙、7c後半。(Werner 1984)



67. 栃木、二荒山神社。唐鞍、14-15c。  
(日本馬具大鑑2)



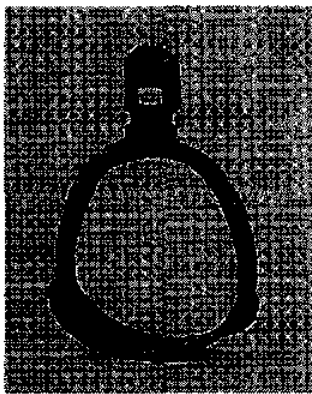
68. ハンガリー、ペー  
チ=キョズテメトゥ。  
鉄鐙、7c。(Kiss 1977)



69. ロシア、アルタイ、ユステイド。鉄鐙、7-9c。  
(アルタイ文明展)



70. 中国。青銅鐙、7c。  
(Bivar 1955)



71. 神奈川、伊勢原下尾崎横穴墓、7c後半。(伊勢原市教育委員会 1955)